

- 1 暗灰褐色土 砂粒を多く含む
- 2 暗茶褐色土 ローム質 焼土粒子を含む
- 3 茶褐色土 ロームをやや多く含む
- 4 焼土 炭化物を含む（カマド覆土）

第53図 第28号住居跡実測図

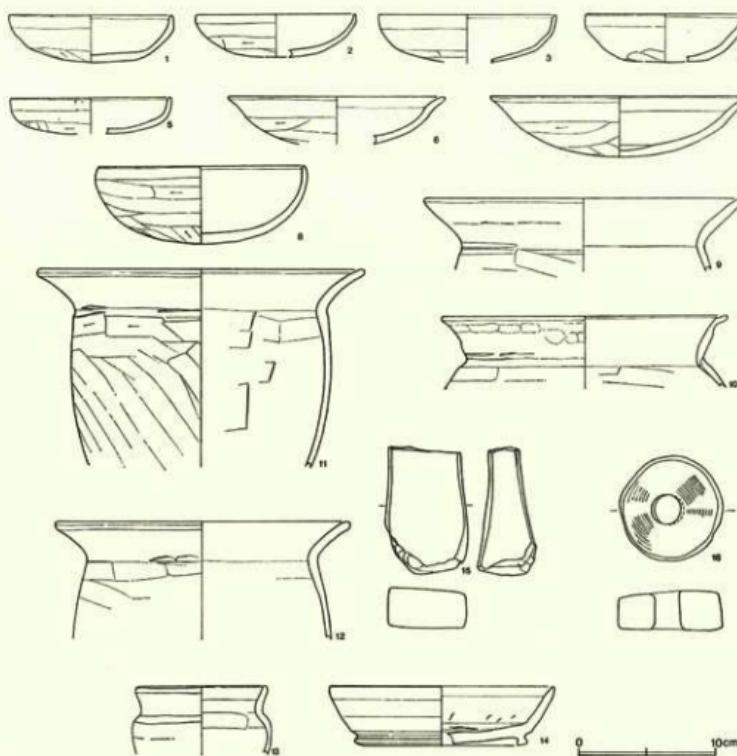
4 大形壺

M I—9類系のもの。10(覆土)20%残。器肉薄く、堅緻。2次加熱。内外面磨滅。橙赤褐色。口縁部は上部が強く外に開く。

5 壺

M I—11類系のもの 11 (No. 5 + 7) 口縁部25%、体部20%残。接合しない2片より成る。小片で歪む為、胴部の傾きはやや異なるものと思われる。橙褐色、一部茶褐色。

M I—12①類系のもの 9 (28住) 21%残。器面荒れる。暗茶褐色、口縁内面一部黒褐色。12(覆土) 22%残。内外面磨滅。明橙褐色。口縁部内面と胴外面一部灰褐色。



第54図 第28号住居跡出土遺物実測図

須恵器

高台付坏 14 (No. 4) 38%残。微細粒砂少量含み、焼成も良い。灰色。大形で底径広く、底部中央が高台よりも突出する器形、内底面に重ね焼き痕、爪あとが残る。高台は貼りつけ高台。まき上げ後、ろくろ整形、底部回転箇削り調整。

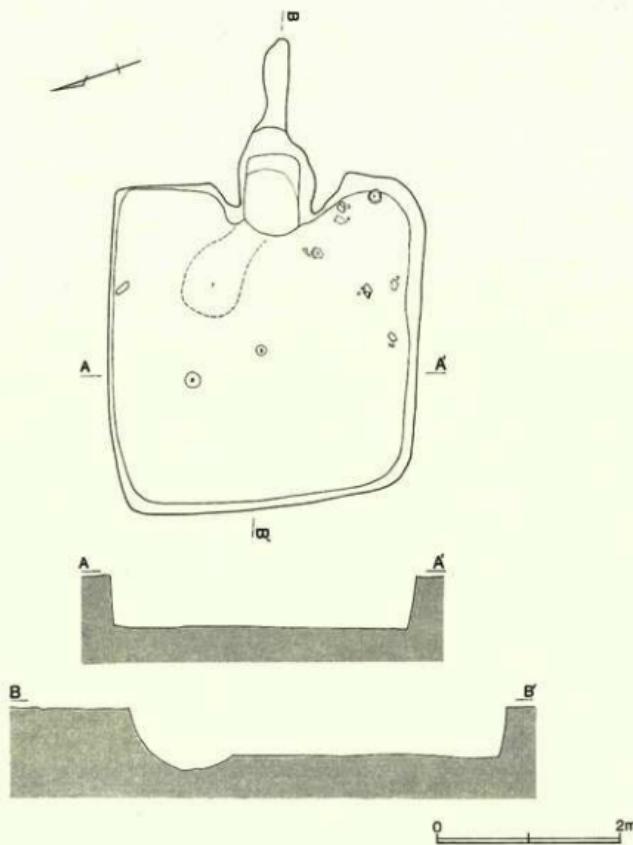
その他の遺物

砾石

15 (No. 3) 石質・細粒砂岩。四面全面使用される。

大形筋鉗車形石製品

16 (No. 1) 石質・角閃石を含む浮石。全面磨られる。



第29号住居跡実測図

第29号住居跡（第55・56図・図版15）

第2地点東側に位置し、北側に第27・23号住居跡が隣接している。

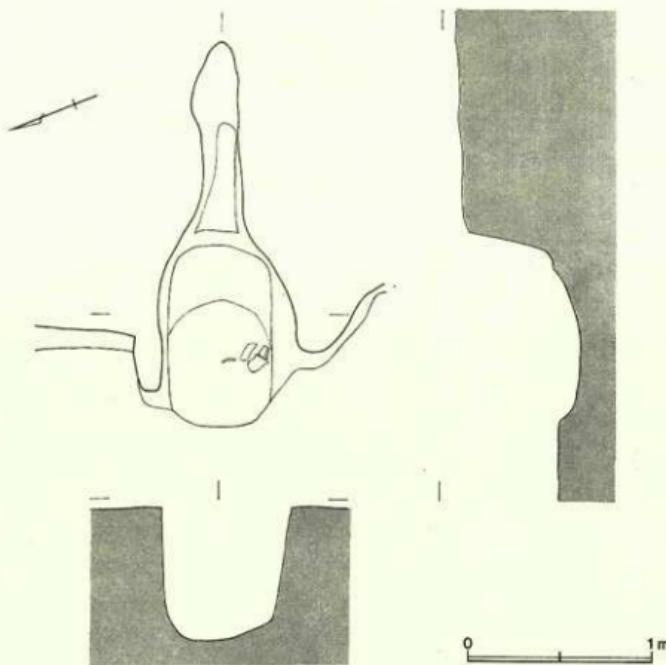
形状は北壁が他の3辺に比べて長い、南側の2隅の丸い不整方形を呈する。

主軸の方向はN-110°-E。

カマドは東壁のはば中央部に壁を47cm程掘込んでつくられており袖は地山を利用した部分が僅かに残っていた。底は舟底状に床面から16cm程掘窪められており、ゆるやかに立上がり、1m程の縦道へ続いている。

床面は平坦で堅い。壁高は55cmと深く、垂直に立上がる。

遺物はカマドから甕11が、そしてカマド前の床面上から甕8、10、13、カマド脇の床面上から坏



第56図 第29号住居跡カマド実測図

が出土しており、2・6・1はやや浮いた状態で出土しており他は覆土中から出土した。

第29号住居跡出土遺物（第57図・図版48）

真間第Ⅰ期に属する。

土器器

1 杯

M I : - 1 類 3 (覆土) 20% 残。基準資料。内面黒褐色、外面茶褐色。2 (No. 5) 65% 残。内外面磨滅。橙褐色。

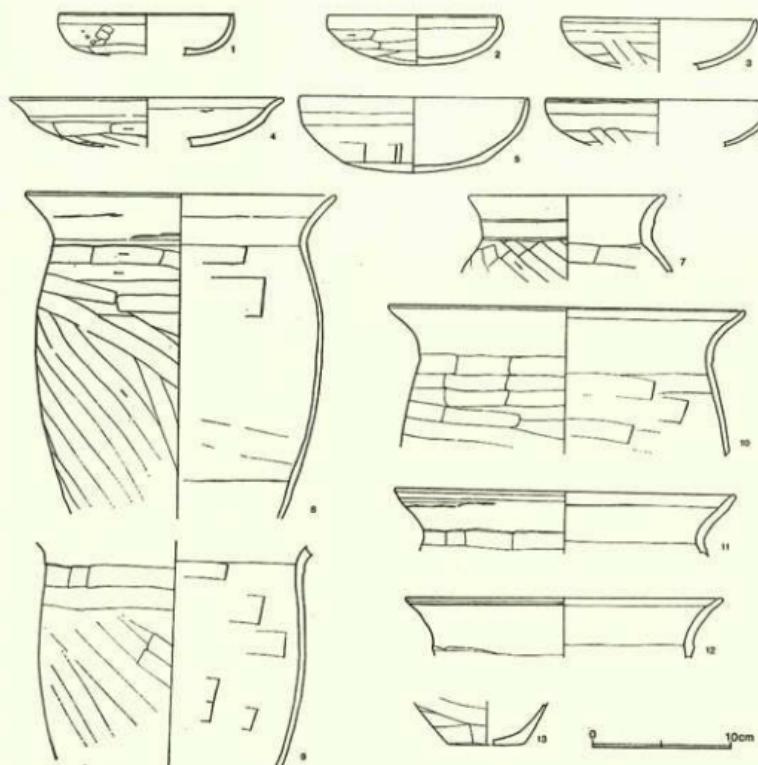
M I : - 2 ②類 5 (No. 1) 基準資料。口縁部48%、底部100% 残。二次加熱のため橙赤褐色～暗褐色を呈する。器外面磨滅。

M I : - 4 ①類 6 (No. 6) 基準資料。15% 残。橙茶褐色。

M I : - 4 ②類 1 (覆土) 基準資料。18% 残。橙褐色。

M I : - 5 類 4 (覆土) 基準資料。13% 残。二次加熱により内外面磨滅。焼成よく焼きしまる。明橙褐色。

2 小形壺



第57図 第29号住居跡出土遺物実測図

M II :—9類 7 (覆土) 25% 残。基準資料。口唇部を欠く。淡橙褐色。

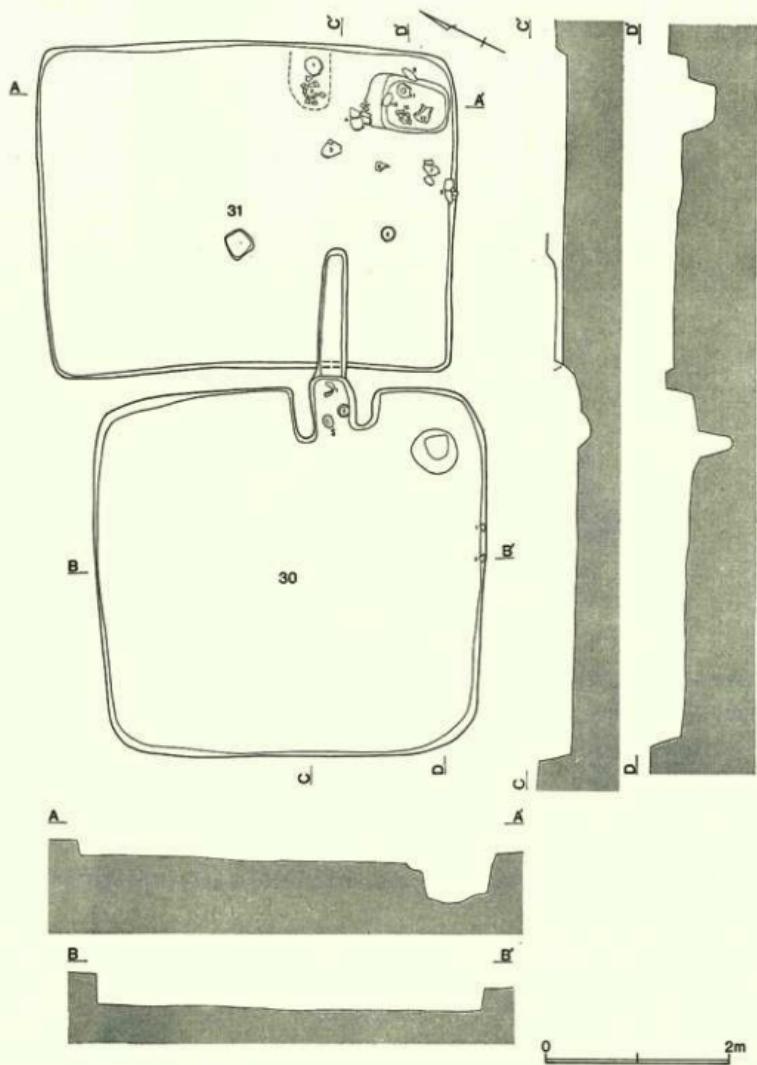
3 壺

M I :—11類系のもの 12 (No. 3) 30% 残。橙褐色。

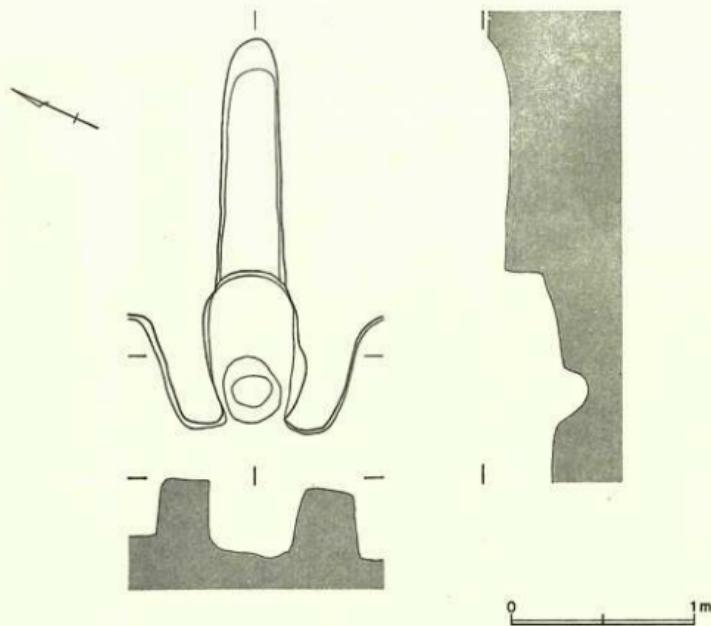
M II :—10類系のもの 10 (No. 7) 口縁部40%、肩部60% 残。接合しない3片より成る。橙赤褐色。11 (No. 7) 60% 残。橙赤褐色、一部橙褐色。

M II :—12②類系のもの 9 (覆土) 25% 残。内面なめらか。外面磨滅、黄橙褐色、内面中位褐色。13 (No. 7) 60% 橙褐色、外面暗橙褐色。

M II :—10類 8 (No. 7) 基準資料。口縁部40%、頸部75%、体部30% 残。明橙褐色。



第58図 第30・31号住居跡実測図



第59図 第30号住居跡カマド実測図

第30号住居跡（第58・59図・図版16）

第2地点北東側にあり、第31号住居跡を切っている。

形状は四隅のやや丸い方形を呈する。

大きさは $4.5 \times 4.2\text{m}$ 。

主軸の方向はN- 65° -E。

カマドは東壁中央部南寄りにつくられており、底は床面とほぼ同じ高さで、 $36 \times 32\text{cm}$ 、深さ 15cm 程の円形のピットがあり、灰が厚く堆積していた。奥壁は垂直に立上がり、煙道は 1.25m 程続き、壁面は赤く焼けていた。

ピットはカマド南側の隅に1カ所あり、直径 49cm 、深さ 40cm 程であり、柱穴かと思われる。

床面は平坦で堅い。壁高は北側で 33cm を測り、ほぼ垂直に立上がる。

遺物はカマド内から流れ込むような形で土師器杯等が出土している。

第31号住居跡（第58図・図版16）

第2地点北東側にあり、第30号住居跡に一部を切られている。

形状は南北方向に長い長方形を呈する。

大きさは3.5×4.5m。

主軸の方向はN—65°—E。

カマドは東壁中央部南寄りに、赤く焼けた部分があり、カマドの崩れたものであった。

貯蔵穴は、カマド南側の隅に、74×68cmの方形で深さ42cm程のピットがあり、土師器壺、壺等が出土している。

床面は平坦で堅い。壁高は北側で17cmを測る。

遺物はカマド内から壺1・3が、そして壺4、壺5・6が貯蔵穴から出土しており壺2は覆土中から出土した。

第31号住居跡出土遺物（第60図・図版49）

鬼高第Ⅰ期に属する。

土師器

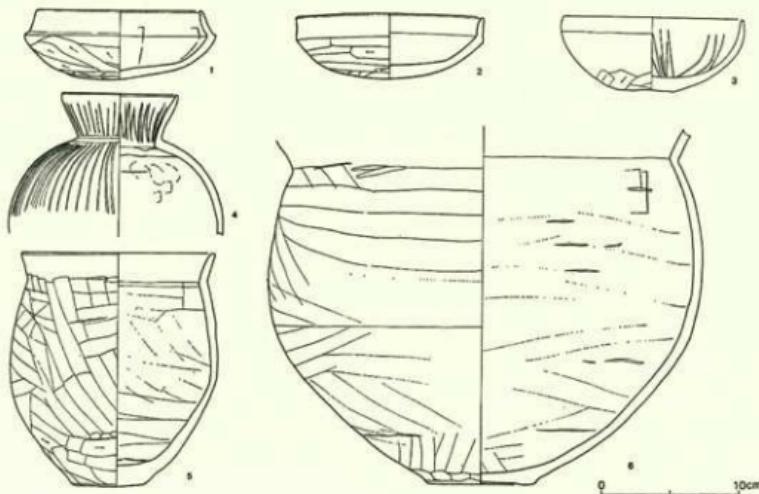
1 壺

O I—1類 1 (No.2) ほぼ完形。基準資料。内面一部煤付着。
O I—2類 2 (No.9) 完形。胎土は基準資料に似るが、焼成は非常に良い。橙赤褐色。内面口縁下に40%にわたり煤付着。

O I—5②類 3 (No.5・カマド付近) ほぼ完形。整形はやや粗い。焼成良。橙茶褐色～褐色内面に荒い窓磨き痕。

2 小形壺

O I—13類 4 (No.11) 上半のみ、100%残。基準資料。



第60図 第31号住居跡出土遺物実測図

O |—16類 5 (No.13) 口縁部55%、底部100%残。基準資料。

3 壺

O |—19①類 6 (No.3・4・8・10・覆土) 頭部30%、底部100%残。45号住の15と同じ器形になるものと思われる。胎土は基準資料と同じ。器内薄く焼成良。赤茶褐色。器外面は荒れる。黒斑。

4 その他

手違いにより図示できなかった土器

O |—8類で大形の高壺

O |—18②類の壺

瓶で、19①類の壺の形態でやや小形、底部が急に窄まる形のものがカマド付近から出土している。焼成良く、赤褐色。

O |—2類の壺で、稜が丸くなり、口縁部が内湾気味にやや開く器形のものが出土している。

|—16類の小形で、胎土に粗い砂粒を多く含んだ壺などがある。

第32号住居跡 (第61図・図版17)

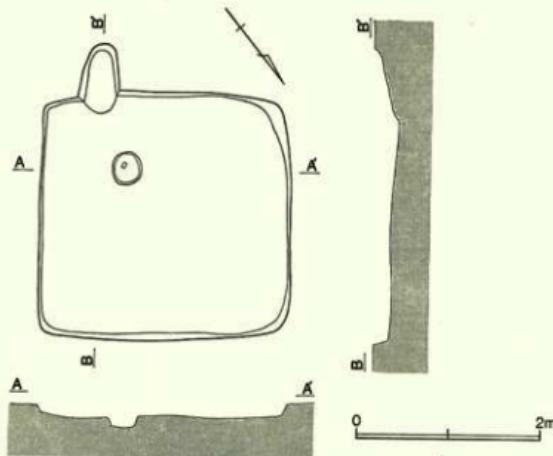
第2地点北東側にある。南北2.5mに第30・31号住居跡がある。

形状は方形を呈する。大きさは2.2×2.2m。

主軸の方向はN—39°—W。

カマドは南西壁を53cm掘込んでつくられており、底は床面と同じ高さで、ゆるやかに立上がる。

ピットは遺構中央部のカマド寄りに、35×31cm、深さ11cm程の円形のものがあるが、性格は不明。



第61図 第32号住居跡実測図

床面は平坦である。壁高は17cmを測る。

遺物は覆土中及びピット中から土器部壊破片等が出土している。

第33号住居跡（第62図・図版17）

第2地点東南端に位置し、西側12mに第25・26号住居跡がある。

覆土は茶褐色土を主とし、上層で淡く、下層はローム粒子を含む。

形状は西壁のやや短かい台形状を呈する。

大きさは3.1×2.9m。

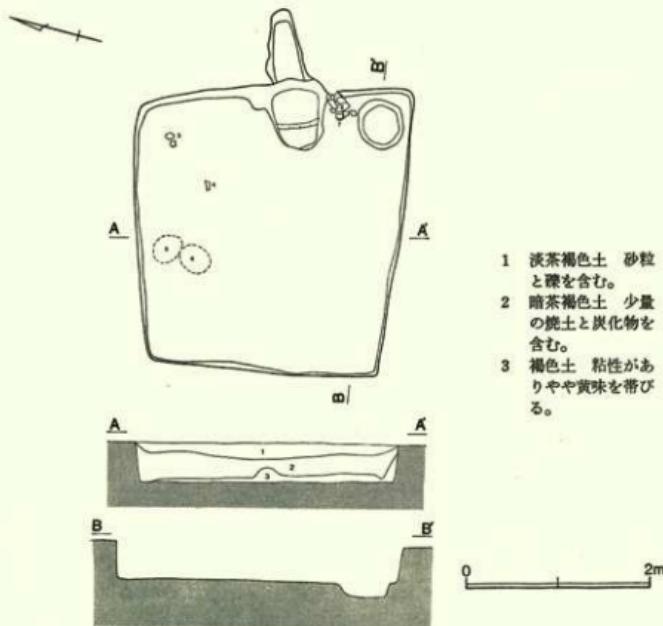
主軸の方向はN-79°-E。

カマドは東壁を掘込んでつくられており、底は焚口部に近い部分で低くなっている。垂直に近く立上がって、幅39cm、長さ75cmの煙道へ続く。又、カマドは向って右寄りに偏位している。

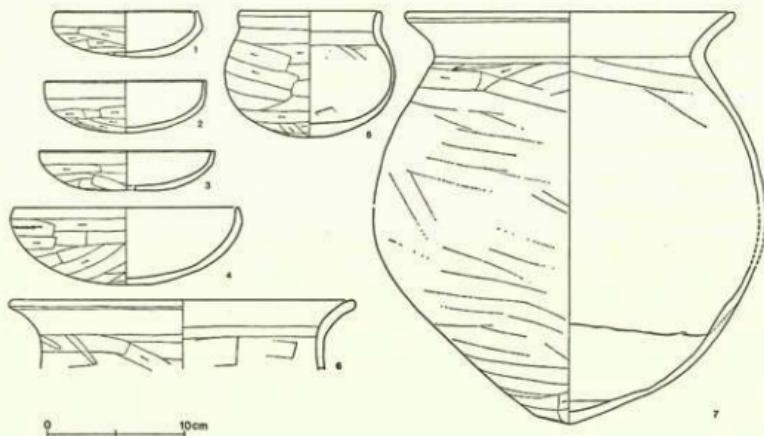
貯蔵穴と思われるピットは南東隅にあり、53×47cmのほぼ円形を呈するが、15cmと浅い。

床面は平坦で堅い。壁高は北側で42cm程ではほぼ垂直に立上がる。

遺物は全て覆土中で流れ込むような状態で出土している。



第62図 第33号住居跡実測図



第63図 第33号住居跡出土遺物実測図

第33号住居跡出土遺物（第63図・図版49）

真間第Ⅰ期に属する。

土器

1 杯

M I-2 頭 2 (No. 7) ほぼ完形。淡橙褐色。外底に黒斑。

M I-4 頭 1 (No. 7) 完形。やや器肉厚い。橙褐色、底部外面一部黒色。

M I-5 ②頭 3 (覆土) 口縁部20%、底部40%残。基準資料。橙褐色、外面黒斑。内面まめつ。

M I-7 頭 4 (No. 1 + 2) 30%残。橙褐色、外底一部黒褐色。

2 小形壺

M I-8 ①頭 5 (No. 3 + 覆土) 口縁部25%、底部100%残。二次加熱で内外面荒れる。明橙褐色。外底黒斑。

3 大形壺

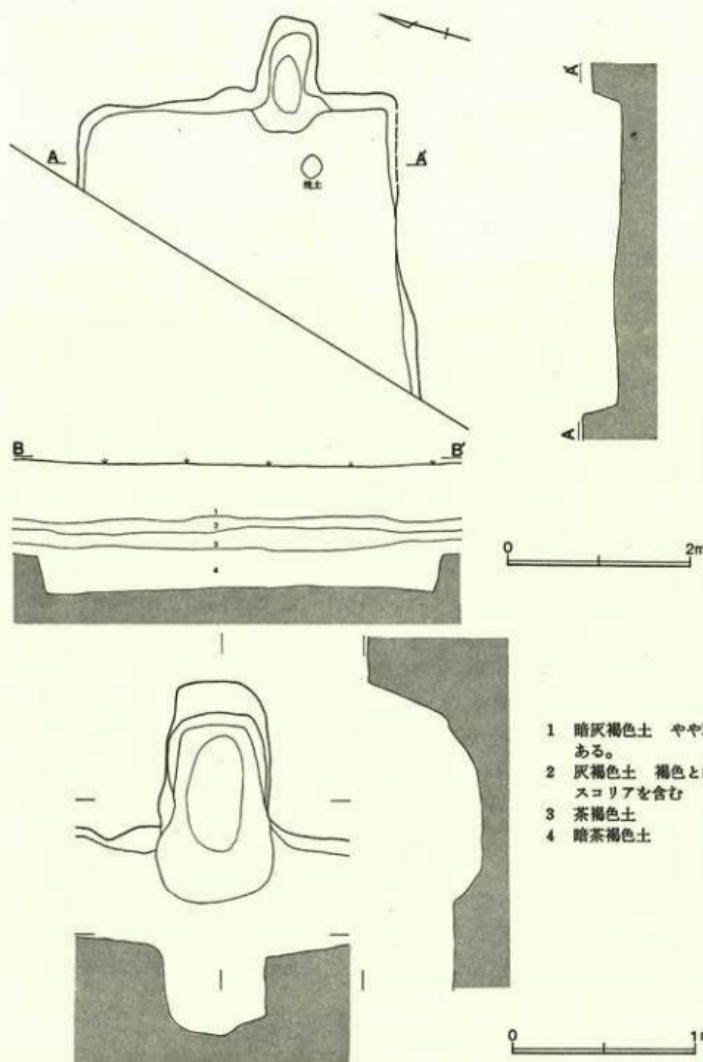
M I-8 ②頭 7 (No. 2) 接合しない胴上半と下半の図上復元。口縁部30%、体部25%、底部100%残。基準資料。内外面まめつ。明橙褐色、胴下半外面暗褐色～黒色。

第34号住居跡（第64図・図版18）

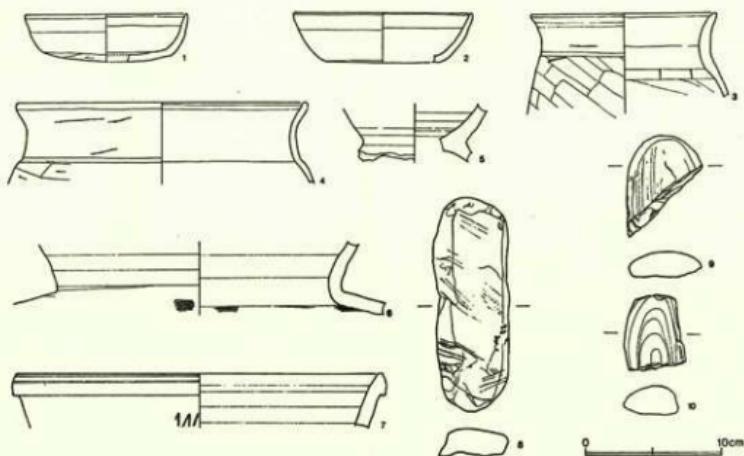
本遺跡の試掘調査を行った際の第1地点北西端のグリッドにかかったものである。

西側は破壊された為、全容は不明である。遺構は第5層を掘り込んでつくられていた。形状は東西方向にやや長い長方形を呈する。

大きさは (3.3) × 3.49m。



第64図 第34号住居跡・カマド実測図



第65図 第34号住居跡出土遺物実測図

主軸の方向はN—73°—E。

カマドは東壁南寄りに壁を83cm程掘込んでつくられており、底は床面より15cm程低く、ゆるやかに立上がる。

床面はほぼ平坦である。壁高は北側で41cmを測り、やや斜め上方に立上がる。

又、カマド近くの床面に直径25cm、深さ3cm程の円形に焼土部分が認められた。

遺物はカマドから壺1・甕4が、他は覆土中から出土した。

第34号住居跡出土遺物（第65図）

真間第Ⅶ期に属する。鬼高第Ⅶ期の1住と註記の段階で一緒になってしまい、混る。

土器器

1 壺

MⅦ—2 ①類 1 (カマド) 45%残。胎土は密でやや軟質。橙茶褐色。

MⅦ—4 類 2 (覆土) 18%残。胎土、焼成とも1と同じ。整形はやや丁寧。橙茶褐色。

MⅦ—9 類 4 (カマド中) 接合しない2片、48%残。胎土は密で焼成も良い。淡橙茶褐色。

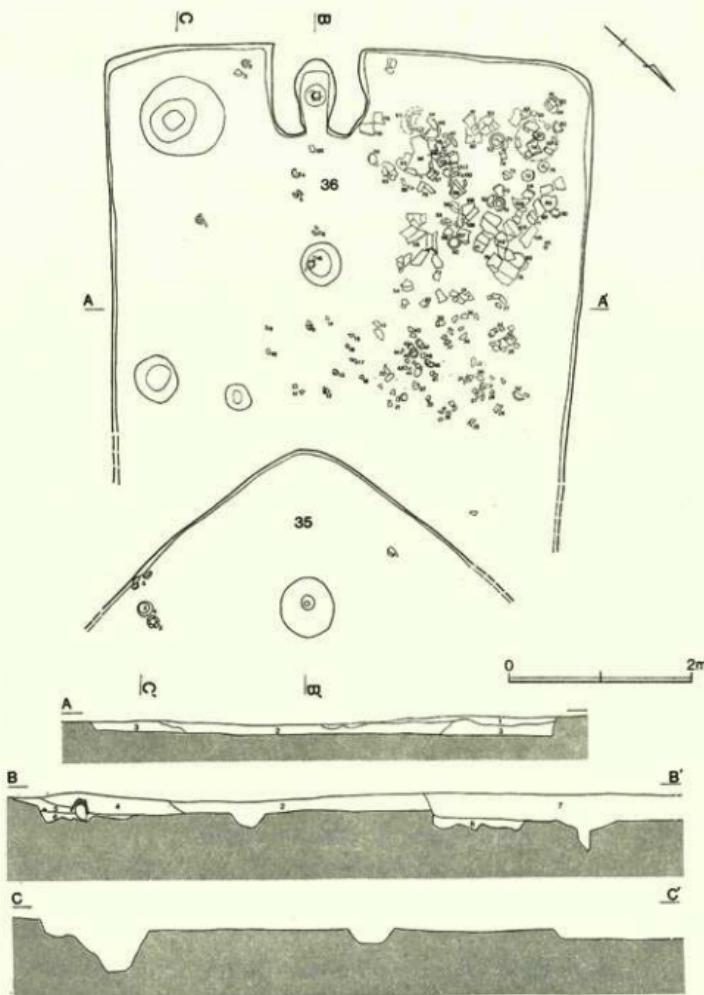
2 その他の遺物

3 (7・20) の小形台付甕は胎土、焼成からMⅠ期のものと思われる。

須恵器

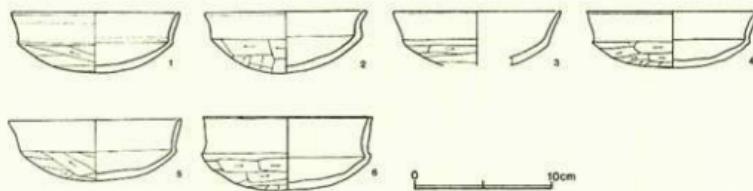
1 甕

5 (覆土) 25%残。微～粗粒砂含む。比較的硬質、台部は「ハ」の字状に開く。灰色、外面胴部暗灰色、サンドイッチ状に割れ口の中は、淡灰色となる。



- 1 茶褐色土 砂・ロームをやや含む
- 2 灰褐色土 烧土・粘土粒子を含む
- 3 茶褐色土 ローム粒子を含む
- 4 褐色土 灰・粘土を含む
- 5 粘土・烧土の混土層
- 6 黑褐色土・黄褐色土の混土層 烧土ブロックを含む
- 7 茶褐色土 ローム粒を含む
- 8 暗褐色土・黄褐色土の混土層 (掘り方)

第66図 第35・36号住居跡実測図



第67図 第35号住居跡出土遺物実測図

6（覆土）8%残。胎土、焼成とも5より良く密で粗粒砂を僅かに含む。暗灰色、割れ口は、紫灰色となる。頭部外に鉄釉が付着する。内面には自然釉が付着、肩部内面に青海波のおさえ具痕、外面は平行線のタキ目が残る。7（覆土）8%残。微細粒砂を含み、焼成甘く軟質。灰色、頭部外暗色（鉄釉か？）拂描文。

その他の遺物

8・9・10は緑物石、3つとも覆土より出土している。石質は8チャート、9・10—緑泥片岩。

第35号住居跡（第66図・図版18）

第4地点東側に位置し、第36号住居跡と切合っている。本住居跡は南西隅が判明したのみで、トレンチ等により立上がりを追ったが検出できなかった。覆土は茶褐色土の單一土層である。

掘り方は壁に沿って約1m程の幅で床面下7cm程に認められた。ピットは遺構中央部に一ヵ所確認されているが、或は柱穴かとも思われる。

遺物は坏1・4～6が床面上から、坏2・3は壁際の床面上に落ち込む状態で出土した。

第35号住居跡出土遺物（第67図・図版50）

鬼高Ⅴ期に属する。

土器

1 坯

0Ⅳ—1①類 2（№5）80%残。口径11.7cm、器高4.5cm。明橙褐色。

0Ⅵ—1②類 1（№2）ほぼ完形。基準資料。淡橙褐色。3（№5）40%残。淡橙褐色。4（№4）ほぼ完形。明橙褐色。5（№2）ほぼ完形。淡橙褐色。

その他の坏

6（№3）ほぼ完形。茶褐色。胎土には微粗粒子を含み、焼成も良く焼きしまる。つくり、整然ともに丁寧である。口径12.3cm、器高5.3cm。混入か？

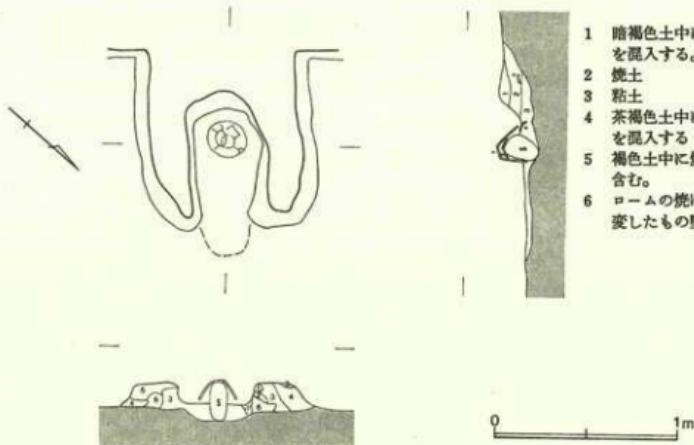
第36号住居跡（第66・68図 図版18・19）

第4地点東側に位置し、第35号住居跡に切られている。

形状は北東側が不明であるが、方形を呈するものと思われる。

大きさは(4.6) × 5.15m。

主軸の方向はN-48°-W。



第68図 第36号住居跡カマド実測図

カマドは南西壁南寄りにあり、床を11cm程掘り窪めて粘土を使って構築している。カマド中央部には河原石を立てて、その上に土師器壺の底部を伏せて支脚として使用していた。

ピットは4カ所確認されているが、南隅は貯蔵穴かと思われ、他のピットは浅く、柱穴とするにはやや不適当であろう。

床面はほぼ平坦で堅い。壁高は北側で21cmでほぼ垂直に立上がる。

遺物はカマドから壺17、甕53、床面上から壺14・20、カマド脇の床面から壺19、高壺31が出土しており、他は全て床面から10cm程浮いた状態で破片で出土している。

第36号住居跡出土遺物（第69・70・71・72・73図・図版50・51・52）

鬼高第Ⅲ期に属する。遺物の量が非常に多い。

土師器

1 壺

O II-1 ①類 1 (No.72) 底部80%、口縁部50%残存。基準資料。橙茶褐色を呈する。16 (第4地點覆土) 1よりも口径が小さい。口縁部は直立気味である。胎土、焼成は1と同じ。口径11.6cm、器高約5.2cm。内面は暗褐色を呈する。9 (No.3) 口径13.0cm、器高5.2cm。胎土には、角閃石、酸化鉄、浮石などの微細粒砂を含み、焼成も良い。つくりも丁寧である。径は小さい。赤褐色。11 (No.37) 口径12.2cm、器高4.7cm。赤彩。口縁はやや開く。つくりは丁寧。口唇部は平坦となり、9と同様である。胎土の色調は黄褐色。この他図示していない個体で4個ある。

O II-1 ②類 10 (No.45) 基準資料。赤彩。胎土には角閃石、酸化鉄、浮石等の微細粒砂を含み焼成も良く軽い。底部外面に黒斑。口唇部内面に煤付着。4 (No.1) 口縁部の器肉は底部と比較して薄い。胎土は角閃石、雲母、酸化鉄、浮石等の微細粒砂を含む。焼成も比較的良い。口縁部の

外反がやや強くなる。13 (No.14) 赤彩。胎土、焼成とも10に近い。口縁部の形態は4に似る。口径は12.3cm、器高5.1cm。22 (No.8) 淡橙褐色。やや軟質。胎土は10に似るが酸化鉄目立つ。口径12.9cm、器高約4.8cm。約40%残。12 (No.35) 口径12.4cm、器高約5.0cm。胎土は4に近い。口縁部は内側につまみ出される。赤彩か？底部外面に黒斑。黄褐色、内面と口縁外面は橙茶褐色。

O II-1 ③類 8 (No.52) S. 13・基準資料。雲母、浮石、酸化鉄、角閃石などの微細粒砂を含む。焼成良。赤茶褐色。底部外面周辺一部黒褐色。5 (No.23・37・覆土) S. 12 8よりやや小形。しっかりしたつくり。胎土は8に似る。口径10.9cm、器高5.15cm。6 (No.37・23) 底部はやや低い。口径11.3cm。器高5.0cm。器内薄く焼成は非常に良い。橙褐色、赤彩か。胎土は微細粒砂を含む。混入物は8とはほぼ同じ。20 (床直) 口径12.5cm、器高5.0cm。底部の高さは6と同様で、口縁部の外反が強い。胎土焼成はO II-1 ①類の1と同じ、他に図示しないもので、カマドより1点出土している。7 (No.1・5) 口径12.2cm、器高4.8cm。口縁部は中位で屈曲して開く。胎土は、角閃石、酸化鉄、雲母等を含み、一部はO II-2 ③類の23と似るが、焼成は良い。この他に2点ある。

O II-2 ①類 S. 11 24 (No.29・45・C区) 基準資料。胎土、焼成共良い。外面に炭化物付着。

O II-2 ②類 3 (No.32) 底部60%残。基準資料。橙褐色、赤彩か。胎土、焼成ともに良く、繊細な感じ。15 (C区覆土) 口径13.0cm、境の稜はやや低くなり、口縁部がやや長い。赤彩。胎土焼成とも3同様である。18 (No.9・B区・覆土) 形態は18と類似するが、つくりは雑である。色調も橙褐色～黒褐色とまだらである。

O II-2 ③類 23 (No.57・103・覆土) 60%残。基準資料。割れ口は灰色。2 (No.43A) 85%残。口径12.5cm、器高5.3cm。23に比べて全体的に鋸さがなくなる。胎土、焼成共に同じ。14 (床直) 48%残、口径13.0cm。器高6.0cm。胎土には角閃石、雲母、酸化鉄、浮石？などの微砂粒を含み、つくり焼成ともに良い。口縁部は先端が内湾しない。9 (No.50) 口径は12.3cm、器高6.2cm。口縁部よりも底部の方が高い。器肉は厚くつくりも粗雑。胎土には粗粒砂小石が目立つ。(酸化鉄、角閃石、石英、雲母、片岩他) 17 (カマド一括) 口径11.9cm、器高5.2cm。約40%残。胎土、焼成は9に類似する。この他図示しなかった個体で6点ある。

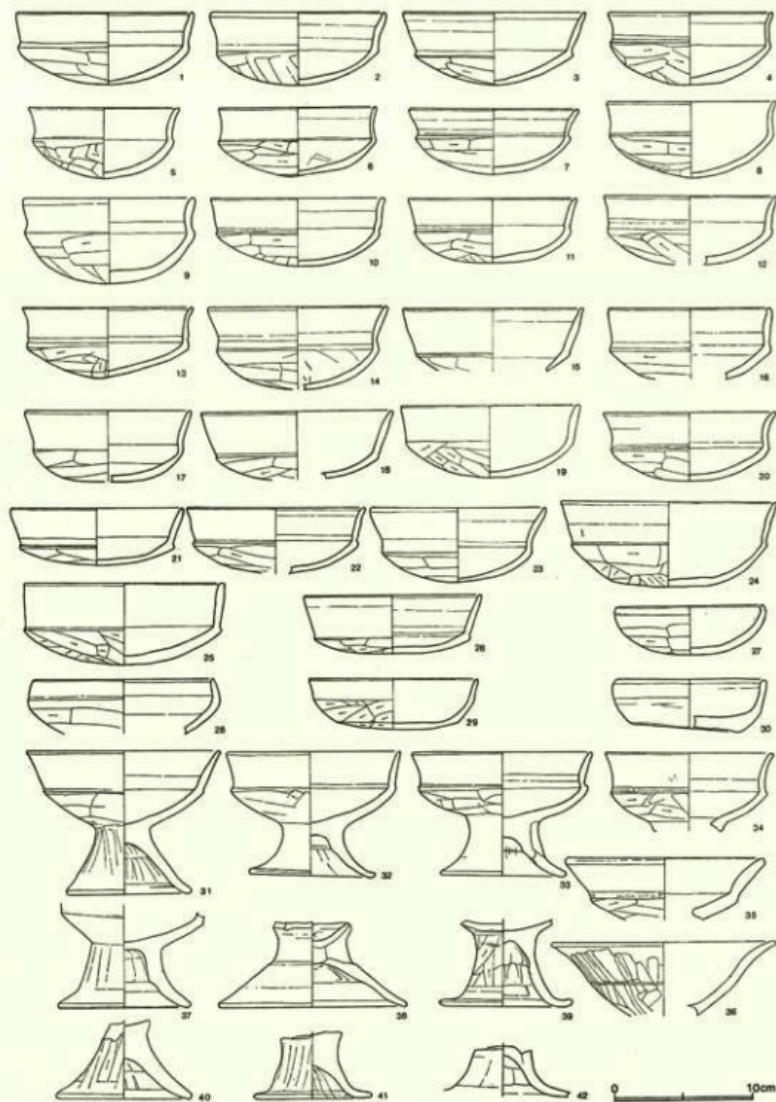
O II-3 類 26 (No.40・42) ほぼ完形。基準資料。21 (No.6) 口径12.5cm、器高4.1cm。赤彩。口縁部15%、底部80%残存。これ以外にも図示しなかったものが一点ある。

O II-4 類 27 (No.63) 約25%残。基準資料。

2 その他の坏

30 (No.24) は異形の土器である。胎土は密で焼成も良い。30%残存。底部は分厚く、口縁部は内湾しながら立ち上がる。口径10.7cm、底径7.7cm。器高3.6cm。口縁から体部横ナデ、底部はヘラナデ調整。25 (No.53) と28 (No.48) は古い様相を示すものである。25は、O II-2 類系のもので、ほぼ完形。口径14.5cm、器高6cm。胎土、焼成ともに良い。橙褐色、赤彩か？ 28は、O II-5 類系のもので口径13.1cm。茶褐色。25%残。29 (No.7・ピット内) 当住居跡に伴うものではない。カマド正面の柱穴より出土。時期は新しいものと思われる。口径12.2cm、底径8.8cm、器高3.7cm。橙褐色、ほぼ完形。口唇部外面7%にタール状の煤付着。口縁部横ナデ、以下箇削り。

3 高坏



第69图 第36号住居跡出土遺物実測図(1)

O II-6 類 33 (No.19) 坏部約50%、脚部75%残。基準資料。32 (No.51) 胎土、焼成とも33と同じ。坏底部がやや深く、脚の接合部が細い。口径12.5cm、器高9.0cm、底径9.2cm。34 (No.64・C区) 坏部のみ60%残。胎土は33に似るが、やや密で、焼成もよく磨滅も少ない。前者と比して丁寧なつくり。口径12.2cm。42 (No.44) 脚部のつくりから同類のものと思われる。黄茶褐色。胎土には雲母の微粒砂含み比較的の硬質。

O II-7 ①類 31 (No.2) 口径14cm、器高10.4cm、底径9.1cm。基準資料。胎土はO II-5 類の33と同じ。ほぼ完形。40 (No.76) 脚部のみ。胎土は31と同じであるが、比較的の硬質。35 (No.26・30・31) 器肉厚い。胎土はほぼ同じであるが、内面の磨滅激しい。口径14.2cm、60%残。37 (No.46) 坏口縁部を欠く。他は完形。胎土は35と同じ坏部内外面とも器面荒れる。脚部のつくりはO II-5 類に似る。底径9.9cm。

O II-7 ②類 36 (No.55) 30%残。基準資料。胎土、焼成はO II-5 類の34と同じ。橙赤褐色。横ナデのあと、縱位の箇ナデつけが施される。38 (No.47) 胎土、焼成共36と同じで、あるいは同一個体とも考えられる。底径13.6cm。

4 その他の高坏

39 (覆土) は脚部内面にしぶり痕を残すものである。裾部35%残。角閃石の微粒砂を含み、焼成も良好硬質である。坏内面は荒れる。41 (No.74) 胎土には角閃石、酸化鉄等を含み、焼成も比較的良好。黄褐色、赤彩が施される。

5 小形壺

O II-9 類 54 (No.80) 30%残。基準資料。砂粒やや多い。淡茶褐色。

O II-10 ①類 45 (A区) 20%残。基準資料。微細粒砂含み焼成良。茶褐色。

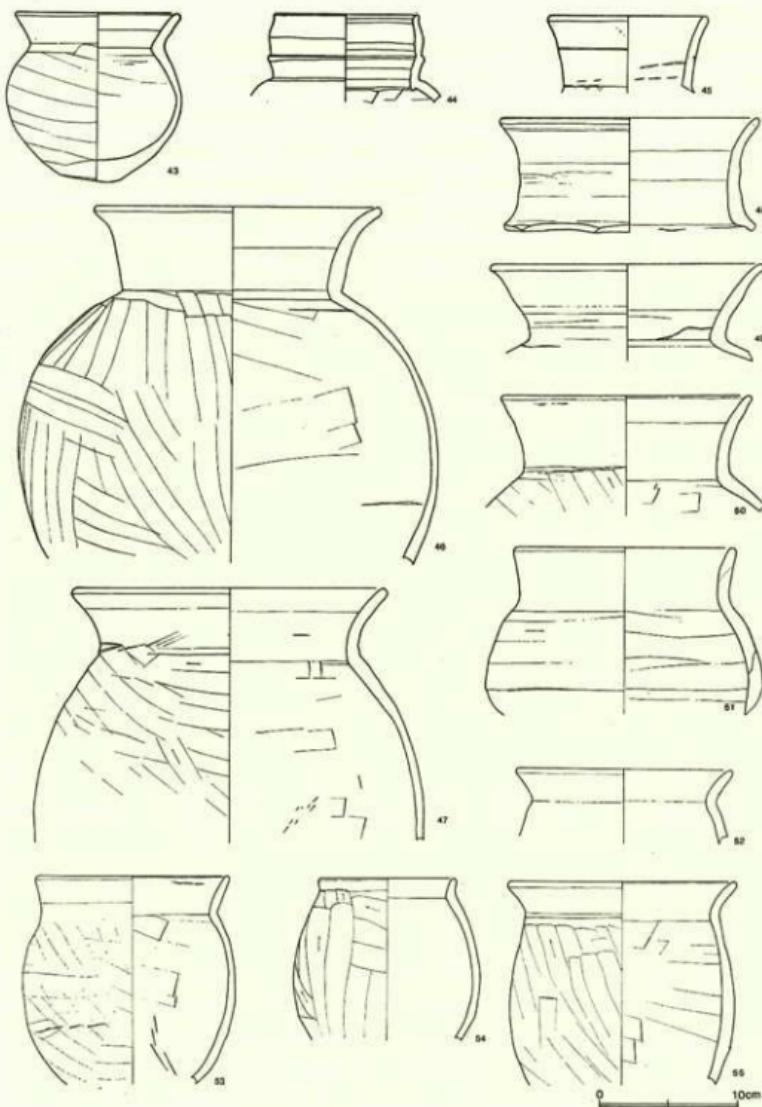
O II-10 ②類 44 (No.96) 48%残。基準資料。角閃石、酸化鉄等の微細粒砂含み良く焼きしまる。淡褐色。

O II-11 類 55 (No.86) 約25%残。基準資料。橙褐色、口縁部外面に黒斑。52 (No.70) 胎土、つくり、蓋形とも55と同じ。胎土には角閃石、酸化鉄等の微粒砂を少量含む。45%残。淡橙褐色。65 (No.108) 胎土は55に類似するがやや焼きが甘い。口縁部は短く外反する。30%残。橙褐色、一部褐色。51 (No.118) 55の胎土に似るが、2~3mm大の粗粒砂や片岩、石英などの小石を多含し焼きしまるが、巻き上げた所から剥離している。やや大形。口縁部は僅かに開いて直立する。

O II-12 類 43 (No.45) 口縁部40%、底部100%、体部70%残。基準資料。角閃石、酸化鉄等の細砂粒を多含し、焼成も良いが、全体的に雜なつくりで、器形も歪む。二次加熱のためか外面の色調は底部黄褐色、口縁部茶褐色、胴部黒褐色を呈する。内面底部に赤彩と思われる赤茶褐色が残る。肩部へ口縁部にかけて、黒褐色。

O II-13 ①類 53 (カマド No.12) 口縁部48%、胴部55%残。基準資料。赤彩。胎土は角閃石、酸化鉄浮石等を含み黄褐色を呈する。焼きしまる。外面は二次加熱のためか、器面荒れ、胴部は朱赤色~褐色と変化する。口縁部横ナデ後、胴部は縱位に箇ナデされ、更に横位の箇ナデを施す。

56 (No.100) 口径15.0cm、頭部径13.1cm。口縁部は外反する。胎土、焼成とも53に近い。外面箇ナデつけが縱位に施される。黄褐色、外面と肩部内面は黒褐色。57 (No.83) 56よりも口縁部は



第70圖 第36號住居跡出土遺物實測圖(2)

更に外反する。胎土、焼成とも同じ。黄褐色。

6 大形壺

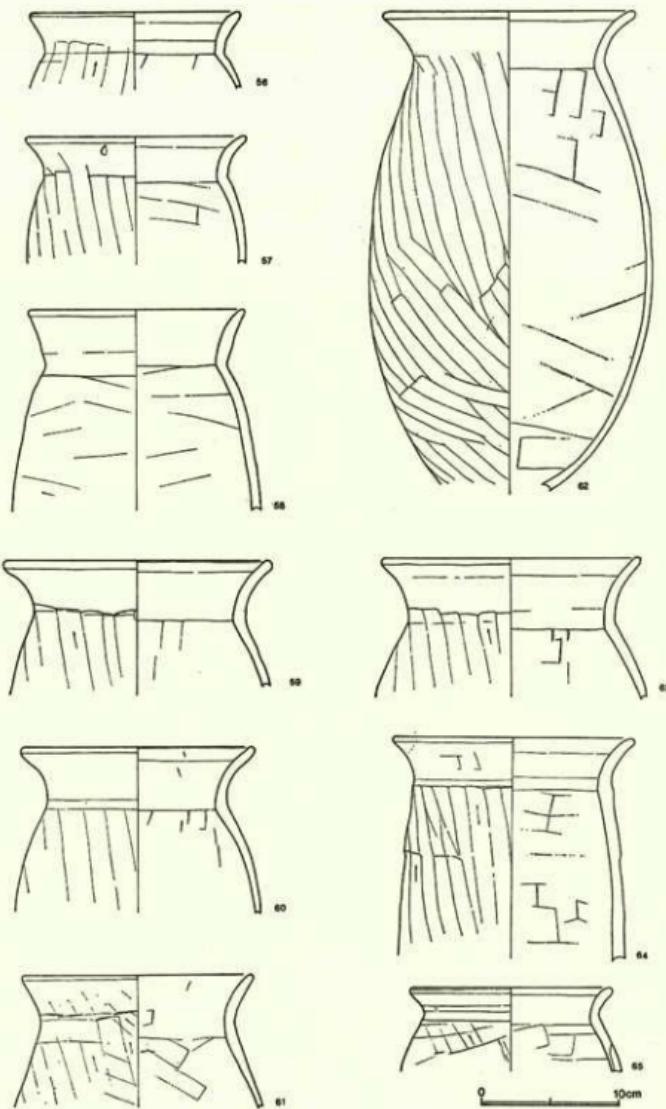
- O III-14類 48 (No.92) 口径18.3cm、頭部径約17.7cm。13%残。基準資料。口縁部は段の上部のみ横ナデされ、口唇部直下にもう一度横ナデされる。段の下部は横位のヘラナデつけが施される。
- O III-15類 46 (No.3・5) 肩部100%、胴部60%、口縁部60%、口唇部5%残。基準資料。Ⅰ期のものに比して胎土に砂粒が多く含まれ、器肉も薄くなるが、全体的につくりは雑な感じとなる。47 (No.27・28・33・55・B区覆土) 口径22.4cm、頭部径18.9cm、胴部最大径28.3cm。46に比べると、胴部の径が小さくなり、口縁が大きくなる。口縁部95%、胴部40%残。赤彩。胎土に含まれる砂粒は、46よりも少なく、軟質できめ細い感じ。淡橙褐色～褐色。49 (No.34) 口径19.4cm、頭部径14.2cm。器形は46に近いものと思われる。石英、雲母、浮石、酸化鉄の微粒砂を含む。焼成はやや甘い。赤茶褐色を呈する。つくりは雑である。50 (No.68) 口縁部45%、肩部100%残。口径17.8cm、頭部径14.9cm。46に近い器形、口縁部は長い。胎土も46に似るが石英等の小石が目立つ。この他に図示しなかったもので、胴下半部の破片がある。

7 壺

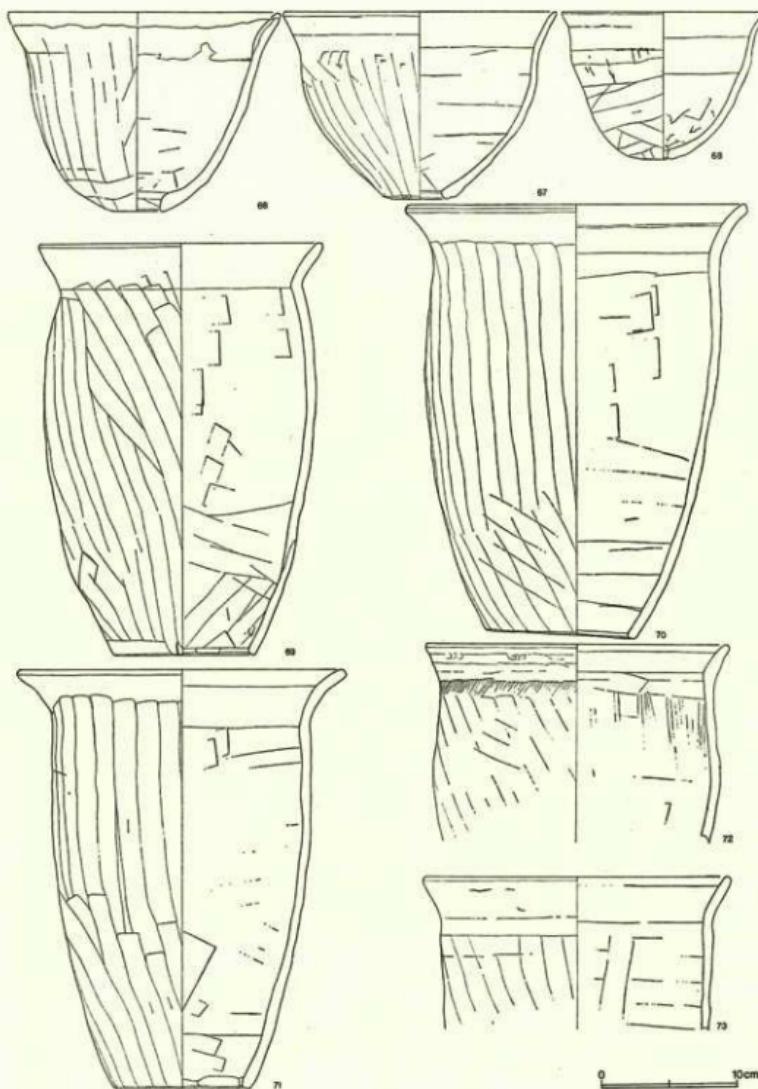
- O III-17類 62 (No.26・29・50・108・114) 約70%残。基準資料。黄褐色、外面は二次加熱のためか赤茶褐色～褐色部分がある。対面して黒斑、赤彩？器肉は薄い。60 (No.191) 胎土、焼成とも62と同じ。赤彩か？ 口径16.6cm、頭部径13.1cm。やや小形。肩部に丸珠をもつ。59 (No.114) 口径19.1cm、頭部径15.4cm、淡黄褐色。胎土、焼成同じ。65%残。63 (No.66・94) 口径18.5cm、頭部径15.0cm。胎土焼成同じ。淡橙褐色。28%残。61 (No.104) 口径16.6cm。頭部径14.0cm。口縁は直線的な開きとなる。胎土は62と比べると砂粒が少ない。酸化鉄、浮石等の微粒砂を含み、やや軟質できめ細い。58 (No.33・38) 胎土は62に類似する。焼成も同じ。口縁部は直立気味となる。器面には、成形時の凹凸が残り、肩部は窓による横ナデが施され、前出のものとは異なる。あるいは小形壺とするべきか？ 64 (A区覆土) 胴部の径が小さくなる器形となる。胎土は、角閃石酸化鉄、石英などの粗粒砂を含み、やや軟質で木目細かい感じがするもの。器内は厚い。口径17.3cm、頭部径14.3cm。

8 瓶

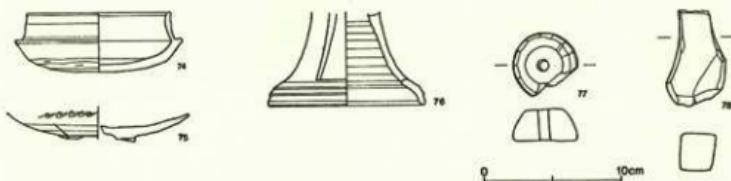
- O III-18②類 71 (No.94) 底部60%、口縁部40%残。基準資料。黄褐色。胎土は角閃石、酸化鉄の微細粒砂と大粒の浮石を含む。焼成良い。赤彩？ 3×5cm位の黒斑が3ヶ所に見られる。70 (A区・カマド覆土・No.39・77・105・119) 口径24.8cm、底径10.9cm、器高31.6cm。胎土は71に似るが、大粒の浮石は含まない。焼成は良くしめる。赤彩？ 黄褐色。73 (No.66・68) 口縁部は短くなる。胴部は直線的、胴土に含まれる砂粒は小さく、木目細い感じ。焼成良く橙褐色。69 (No.101・102・80・78・103) ほぼ完形。赤彩。肩部に丸珠をもち頭部で括れ、短い口縁部が「へ」の字状に開く。口縁部横ナデ後、刷毛状工具による縦位～斜位のナデつけ、胴部内面はヘラナデつけのあと磨かれ光沢をもつ。赤茶褐色。72 (No.12) 頭部の括れは甘くなり、短い口縁部は厚味を増す。赤彩か？ 胎土、焼成は、69に似る。整形も内面は磨かれ、外面も頭部を刷毛でナデたあと笠削が施される。



第71図 第36号住居跡出土遺物実測図(3)



第72图 第36号住居跡出土遺物実測図(4)



第73図 第36号住居跡出土遺物実測図(6)

9 小形瓶

O II-18類 67 (No.67・103) 口径20.2cm、孔径3.7cm。基準資料。明橙褐色。黒斑。約45%残。
O II-20類 68 (No.88・89・103) 底部75%、口縁部13%残。基準資料。66(No.80) 胎土には、片岩石英等の小石を多く含み、焼成も良く焼きしまる。淡橙褐色～淡褐色。口縁部は巻き上げ部から剥離している。整形は難。

須恵器

1 杯

74 (48・40住C区覆土) 細粒砂を僅かに含む。比較的軟質。灰色。ろくろ整形後、底部回転窓削り。口径10.4cm、器高4.3cm。註記のミスにより40住の破片と接合したものと考えられる。

2 高杯

75 (No.34) 杯底部のみ25%残存。胎土は土師器に似て、角閃石、酸化鉄等の微細粒砂を含む。色調も赤褐色を呈し、焼成も良くない。底部外面は回転窓削り、上部には波状文が施される。底部には脚部の透かしを切ったときの痕が残る内面は殆んど器面が剥離した状態である。76 (No.98) 脚据部には2段の段を持つ。胎土は微粗粒を多く含み、焼成悪くザラザラした感じ、接合しない2片より成る。約50%残。灰黒色。透かしは3ヶ所穿けられる。接合しない3片よりの復元実測。

その他の遺物

筋錘車

77(36住) 土製。30%を欠く。50g。角閃石、浮石、酸化鉄などの微粗粒砂を含み、焼成良好焼きしまる。橙褐色。窓ナデによる面取り。長径4.7cm、短径4.7cm、高さ2.2cm、孔径約8mm。

砥石

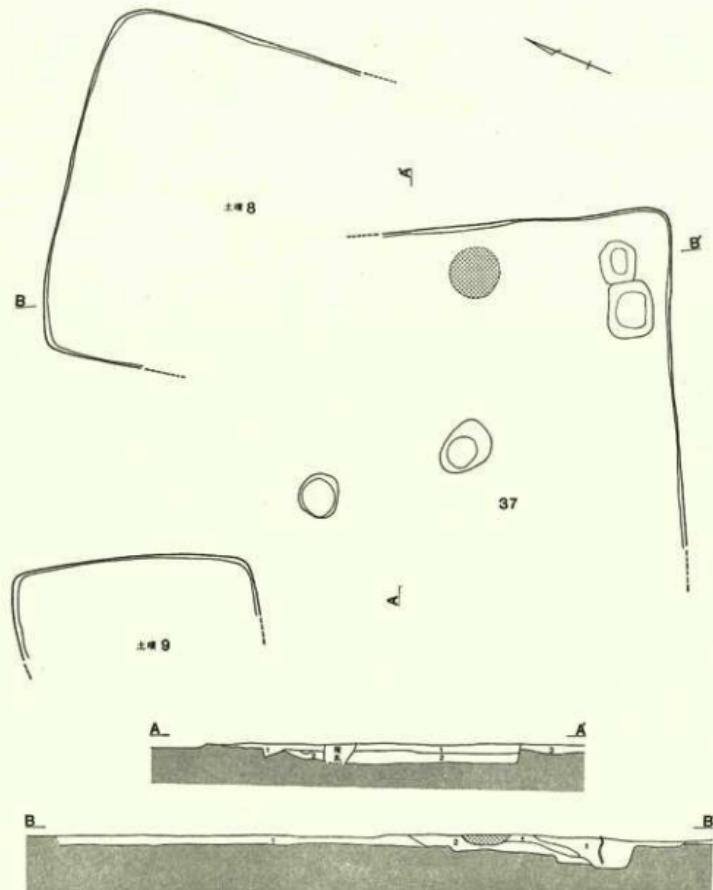
石質は細粒砂岩。四面全面を使用している。

第37号住居跡（第74図）

第4地点東側に位置し、西に39・38、南に41号の各住居跡が隣接しており、北側に8・9号土塙がある。全体として非常に浅く、南及び東側の立上がりが確認できたのみであった。

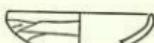
覆土は黒褐色土を主体として良くしまっていた。

形状・大きさは不明であるが、南東隅から見ると、方形を呈するものと思われる。

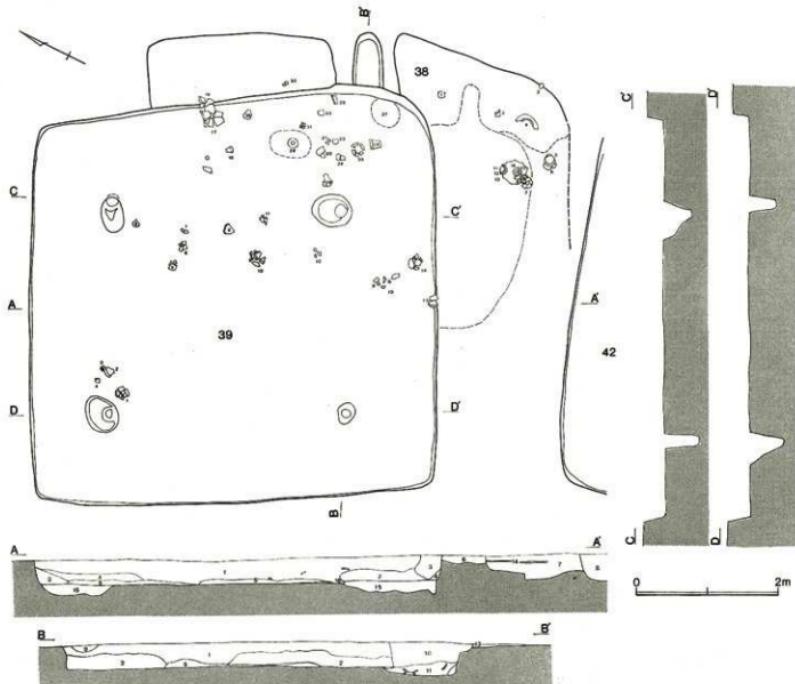


- 1 黒褐色土 堅く砂・炭化物を少量含む。
- 2 暗褐色土 堅く1よりやや黄味が強く粘性がある。
炭化物を少量含む。
- 3 暗褐色土 2にほぼ同じ
- 4 粘土
- 5 燃土 堅く良く焼けている。カマドの残存と思われる。

第74図 第37号住居跡実測図



第75図 第75号住居跡出土遺物実測図



- 1 灰茶褐色土 粘土。黄褐色土砂を主として炭化物・焼土粒子を多く含む。
2 淡茶褐色土 黄褐色土。粘土を含み粘性がやや強い。
3 淡黑褐色土 1に近く粘土・砂は少ない。
4 淡黑褐色土中に黄褐色土塊を含む。
5 灰色粘土
6 淡暗茶褐色土
7 灰茶褐色土 1に近いが砂・焼土・炭化物は少ない。
8 灰茶褐色土 1に近い。
9 灰茶褐色土 1より黄褐色土・炭化物を多く含む。
10 淡黑褐色土 非常に粒子がこまかい。
11 暗褐色土 灰色粘土の粒子を一様に含む。
12 淡黑褐色土
13 黄褐色土
14 黄褐色土
15 黄褐色土混入黑褐色土

第76図 第38・39号住居跡実測図

東壁近くに赤く焼けた焼土部分が認められ、これから南側に粘土の薄い層が見られる事から、カマドの残存部分であろうと思われる。床面は平坦で堅い。覆土中から壺1が出土している。

ピットは4ヵ所確認されているが、南東隅の2ヶ所はこの遺構に伴なうものと考えた。東壁寄りのピットからは土師器瓶破片が出土している。

第37号住居跡出土遺物（第75図）

真間第Ⅰ期に属する。

土師器壺

MⅠ-4類（覆土）25%残。橙褐色。

第38号住居跡（第76図・図版19）

第4地点北側に位置し第39号住居跡の上につくられており、第42号住居跡が南側に隣接している。

本住居跡は確認面ですべて床面のなくなっている部分が多く、東側壁・カマド等の存在を確認したに留まる。形状は不明。大きさは南北方向に5.8mである。

カマドは東壁中央部につくられていたが地山を掘り残した袖と底面の焼けて赤変した部分が検出された。床面は一部がカマド南側に残っており、点線で図示した範囲内である。

遺物はカマド南側の床面部分から甕14が、そして南壁寄りの床面から壺2・5・7が、又、中央寄りの床面から壺4・6・7・9、壺16が、そして壺11・12はその脇に重なって置かれていた。甕17は第39号住居跡上の部分から出土しており、攪乱溝にかかっている。

第38号住居跡出土遺物（第77図・図版52）

鬼高第Ⅶ期に属する。39号住と重複し、遺物は混同している。

1 壺

OⅣ-1類 9(39号9) 器形は低く、口縁は内傾する。黒色仕上げ。30%残存。

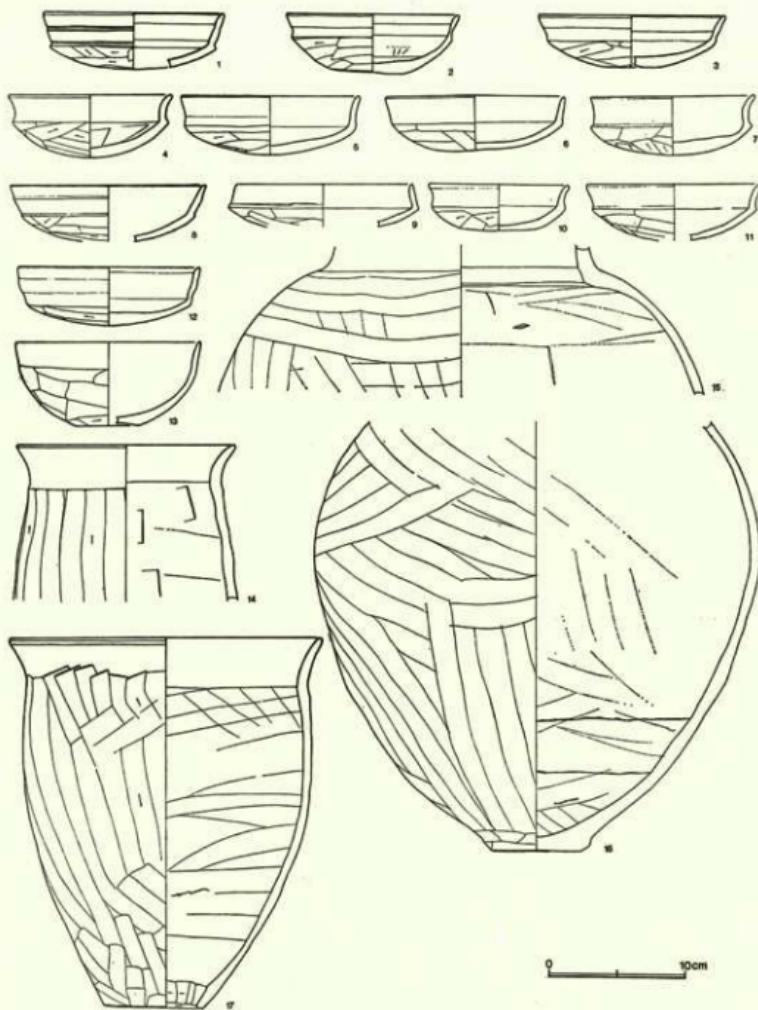
OⅣ-2類 12(38号13) 胎土、焼成は55号住の9と同じ。黒色処理が施される。口縁部には丸味をもった2段口縁風になる。

OⅣ-3②類 3(39号住) 口縁は短かく、一度立ってから外傾する。底は丸くなる。底部は、2のように接地面を意識した感じで平坦になる。胎土は55号住の15に近い。橙褐色、内外面に黒色処理の痕跡。11(39号12)胎土は55号住12と同じ。40%残。2(39号住・3号2)胎土は角閃石、浮石を含み、焼成良。橙赤褐色。底部は平坦になり、体部は「ハ」の字状に開いて底をもち、口縁部は一度内傾して立ち、「ハ」の字状に開く。

OⅣ-4①類 5(39号6)50%残。胎土は密で酸化鉄が目立つ。その他石英などの微粒砂と極く僅かの小石を含む。淡黄～橙褐色。口縁部の開き方はやや弱い。焼成甘くやや軟質。器肉も一定。

OⅣ-4②類 7(39号7)ほぼ完形。基準資料、胎土は5に似るが、砂粒の量が僅かに多い。つくりも雑な感じとなる。底部は分厚い。焼成もやや甘い。黄～橙褐色。10(39号6)胎土、焼成とも7と同じ。小形となる。口径10.2cm、器高3.4cm。4(39号8)胎土は10と同じ、底部はきれいな弧を描き、やや底部の方が高くなる。口縁は強く外反する。淡橙褐色、内面は黄褐色。

OⅣ-6類 1(39号住・C区)25%残。基準資料、8(39号6)胎土に含まれる砂粒は1より細かい。黄褐色。赤彩か？ 形態はほとんど同じ。



第77图 第38号住居跡出土遺物実測図

2 塚

O IV-1-8類 13 (No. 9) 口縁部40%、底部60%残存。淡橙褐色、内面一部黒褐色、口縁部外面一部茶褐色。

3 大形壺

O IV-1-15類 15 (No. 4) 13%残。基準資料。胎土には角閃石、浮石などの微細粒砂の他、長石などの粗粒～小石を少量含み密で、焼成も比較的良い。橙茶褐色～淡褐色。

16(底部No. 6)(胸部No. 14)底部100%、胸部30%残。胎土は14とはほぼ同じであるが、赤色粒が目立つ。外面茶褐色、胸部下位に黒斑。底面に木葉痕。内面、暗褐色。底部茶褐色。

4 壺

O IV-1-16類 14 (No. 5) 口縁部は立ち気味で、胴上部は、直線的な開きとなる。55号住38と同様になるものと思われる。胎土には浮石、赤色粒などの微粒砂と、石英などの粗粒砂が目立つ。焼成も比較的良い。橙茶褐色。

5 瓢

O IV-1-17②類 17 (39号住No. 17) ほぼ完形。外面赤彩か？ 胎土には赤色粒、浮石などの微細粒砂と長石などの粗粒砂、小石をわずかに含む。焼成良。内面淡橙褐色、外面淡黄褐色、 $5 \times 6\text{cm}$ の黒斑が高さは異なるが対面してある。比較的丁寧なつくり。

第39号住居跡（第76図・図版19）

第4地点北側にあり、第38号住居跡がこの上にあった。本住居跡のカマド周辺部には後世の擾乱溝があり、カマド周辺はこれに埋されている。覆土は灰茶褐色土、暗茶褐色土が堆積し、床面上には薄い粘土層が見られた。

形状は南東隅がやや丸い方形を呈する。大きさは $5.6 \times 5.7\text{m}$ 。主軸の方向はN-64°-E。

カマドは擾乱溝により埋され、はっきりしないが、東壁近くから出土している。高杯9は伏せた状態で出土し、周辺部に焼土が見られる事から、カマドの支脚として使用されたものと思われる。

柱穴は4ヵ所確認されており38～49cmを測る。掘り方は南側と北側に、床面下16cm前後に黒褐色土、粘土、黄褐色土の混土層となっていた。遺物は中央から東寄りに多く、カマドから高杯6、床面から高杯5が出土しており他は覆土中の出土である。

第39号住居跡出土遺物（第78・79図・図版53）

鬼高第Ⅰ期に属する。

土師器

1 杯

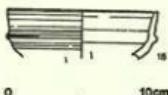
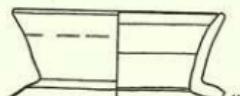
O I-5類 2 (No. 29) 60%残。橙茶褐色。外面底部一部黒色

4 (No. 18) 55%残。橙茶褐色。

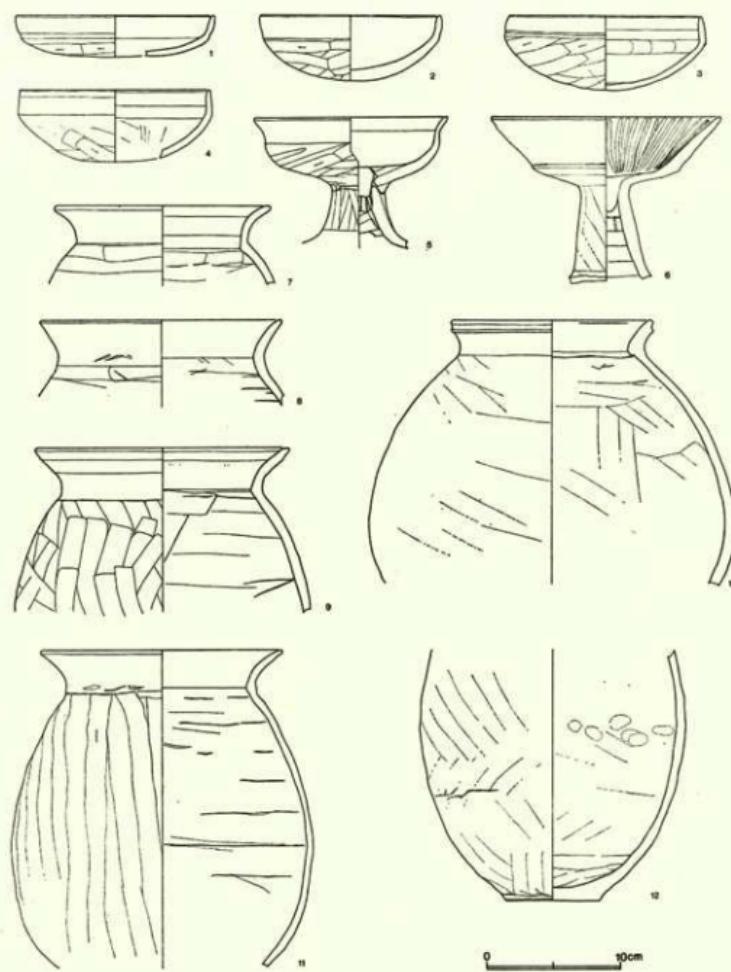
2 高杯

O I-8類 5 (No. 1) 口縁部と脚裾部を65%欠く。基準資料。

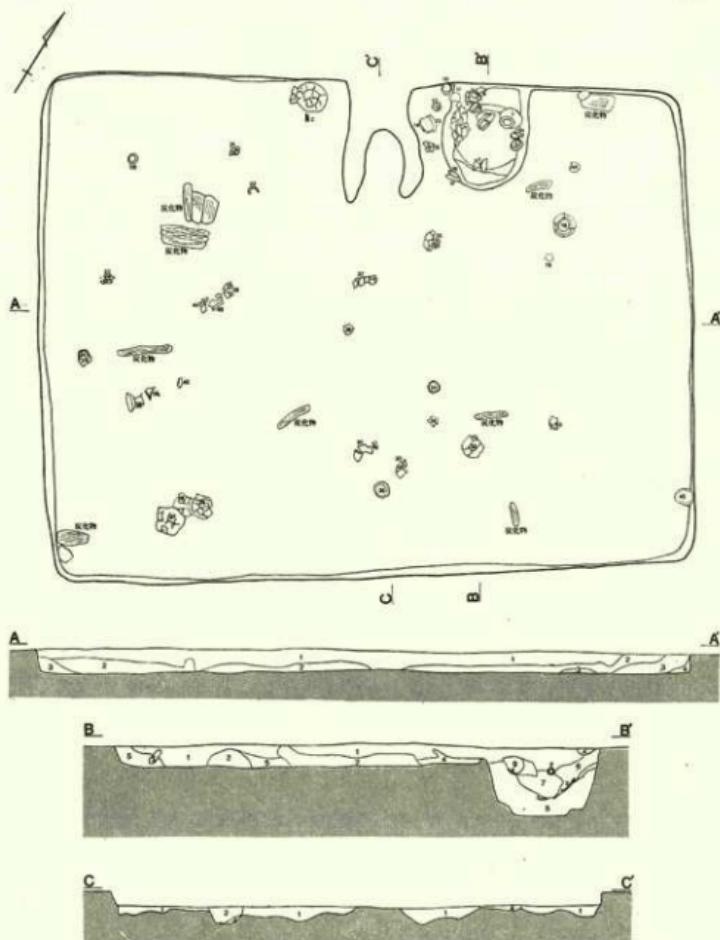
赤彩。



第78図 第39号住居跡出土遺物
実測図(1)



第79図 第39号住居跡出土遺物実測図(2)



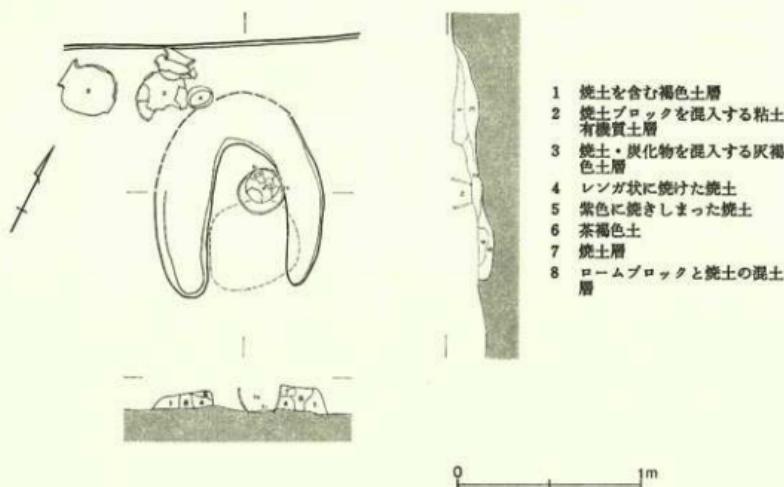
- 1 灰褐色土 2 暗褐色土 3 暗褐色土 4 暗褐色土
5 烧土 6 茶褐色土 7 灰褐色土 8 暗灰褐色土
9 暗褐色粘土

※全体として粘土分が多く堅緻である。

C-C'

- 1 黑褐色土 2 暗褐色土 3 灰色粘土
4 烧土（カマド底）

第80図 第40号住居跡実測図



第81図 第40号住居跡カマド実測図

O | —9①類 6 (No.29) 壁底部10%欠く。笠磨きが内面に施される。赤彩? 基準資料。

3 小形壺

O | —14類 7 (No.28) 肩部の張りは弱く口縁部は強く外反する。10 (No.10) 最大径が胴下半になり、口縁部も短い。14 (No.25) 肩部は張り、長い口縁部は「へ」の字状に開く。胎土は密で焼成も良い。

4 壺

O | —19①類 9 (No.13・15・29・覆土) 口縁部38%、胴部30%残。胎土には微細粒砂、小石含み、焼成良。橙褐色。12 (No.26・29) 底部100%、体部30%残存。橙褐色、外面体下半に黒斑。焼成良。内面磨滅。11 (No.29) 口縁部8%。胴部40%残。焼成良。内面黄橙褐色。外面淡橙褐色。

5 瓶

O | —20類 8 (No.27) 23%残存。焼成良。橙茶褐色。

6 須恵器

18 (覆土) 高壺あるいは、蓋かと思われる。胎土は密で硬質、灰青色を呈する。26%残存。

第40号住居跡 (第80・81・79図・図版20・21)

第4地点北側にあり、南西5.5mに第46号住居跡がある。

本住居跡は火災を受けた為か、造構確認面では壁内側部分に炭化物が線状に見られ、プランの確認は比較的容易であった。覆土は粘土・砂粒を含んだ灰褐色土を主とし、下層ではローム分を含み、粘性が高い。形状は東壁に比して西壁がやや長い長方形を呈する。

大きさは $5.4 \times 7.2\text{m}$ 。主軸の方向はN— 32° —W。

カマドは北壁中央部東寄りに壁からやや離れた位置にあり、黄褐色土・茶褐色土を使用して構築されており、中央部には土器器高坏の破片と甕胴部破片を立てて支脚として使用したものと思われる。底面はレンガ状に焼けて赤変している。

貯蔵穴はカマド東脇の壁際にあり、 $1.2 \times 0.95\text{m}$ の長方形を呈し、深さ63cmで、底は平坦で、65cm四方が低く窪んでいる。覆土は暗灰褐色土を主体とし、上層には砂を多く含んだ灰褐色土が堆積していた。貯蔵穴内には、土器器坏、高坏、壺等が流れ込むような形でまとまって出土している。床面は平坦で堅い。壁高は東壁で20cmを測り垂直に立上がる。

遺物は遺構内の各所からやや床面から浮いた状態で出土しており、カマド中からは坏1・11・塊23、高坏30・甕40・42・46が、貯蔵穴からは塊1・2・坏12~15・17~19、高坏28・29、壺33・34が出土しており、床面上からは塊7・14・24・25、高坏27、壺35が出土しており、他はやや浮いた状態で覆土中から出土した。

第40号住出土遺物（第82・83・84・85図・図版53）

鬼高第Ⅰ期に該当する。（火災住居）

遺物量が多い。

土器器概して胎土、焼成とも良い。

1 坏

O I—1類 16 (No. 2・6・8) ほぼ完形。橙褐色。

O I—2類 19 (No. 6) S. 2 口縁部50%、底部100%残。基準資料。底部暗文風範磨き。赤褐色。

O I—3類 20 (No. 15) 18%残。基準資料。橙褐色。一部黒褐色。

O I—4①類 4 (No. 22) 赤形。基準資料。5 (No. 16) 約60%残。淡橙褐色。赤形。

O I—4②類 1 (No. 8) S. 4 ほぼ完形。淡茶褐色。2 (No. 8) S. 3 95%残。赤褐色。3(カマド一括) 口縁部8%、底部20%残。やや軟質。橙褐色。外面磨滅。

O I—4③類 6 (No. 39) 30%残。基準資料。暗茶褐色。

O I—5①類 15 (No. 8) 完形。基準資料。17 (No. 3) ほぼ完形。茶褐色。18 (No. 2) S. 1 ほぼ完形。赤褐色。12 (No. 11) S. 5、ほぼ完形。橙褐色。

O I—5②類 13 (No. 1) 完形。基準資料。10 (No. 17) 45%残。橙茶褐色。7 (No. 10) 完形。暗赤褐色。14 (No. 7) 90%残。赤褐色。8 (No. 8・9・12) 75%残。赤褐色。11(カマドNo. 4) ほぼ完形。赤褐色。9 (No. 35) 80%残。九底で器高が低い。口縁部直立。赤褐色。

2 その他の坏

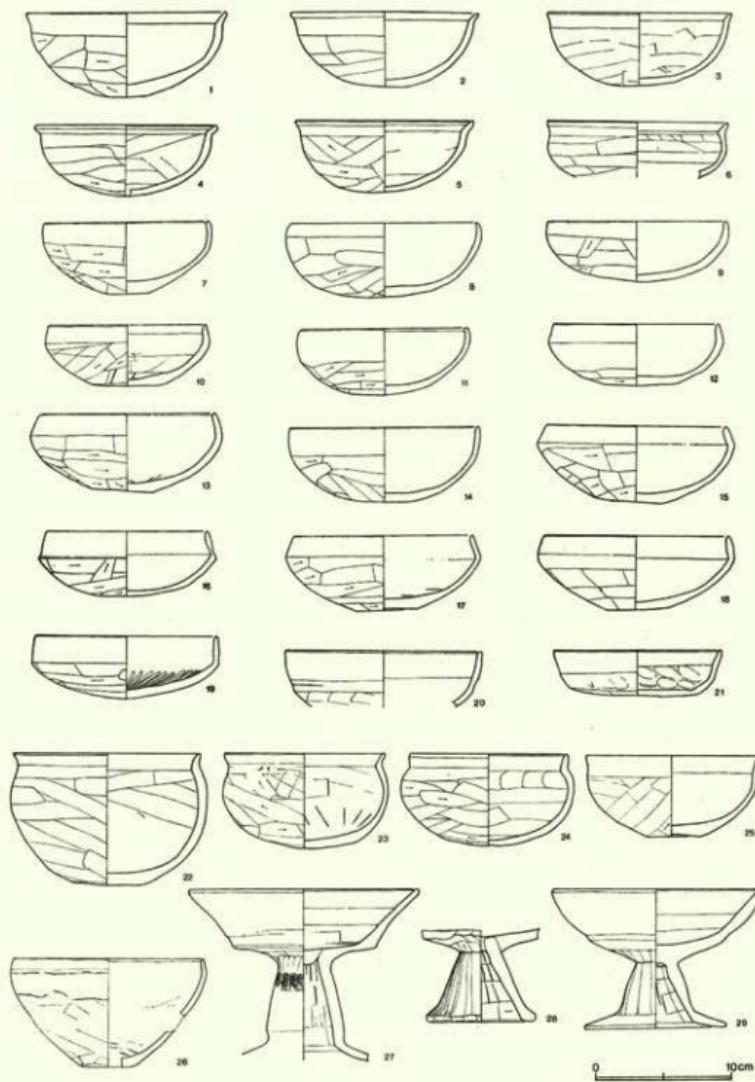
20 (No. 15) いわゆる鬼高期の坏で、稜をもって口縁部は内湾気味に開き、先端でやや開く。18%残。21(覆土)は混入と考える。

3 塹

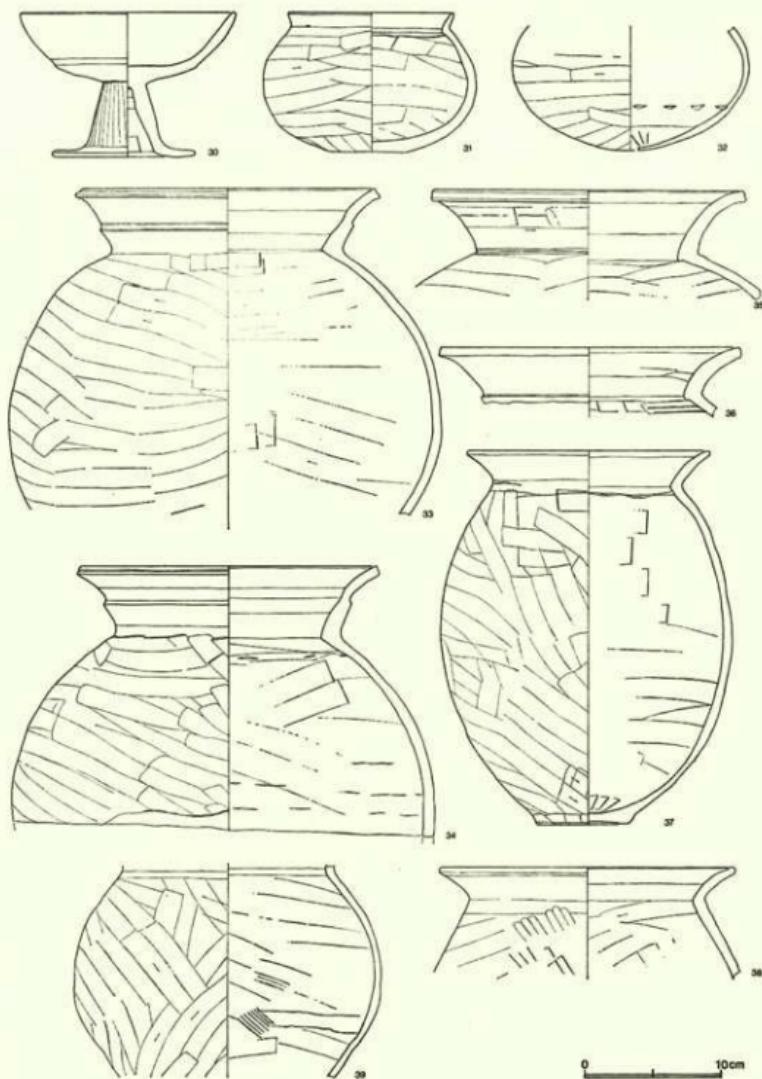
O I—6類 25 (No. 12) 口縁部35%、底部100%残。焼成良。やや軟質。器面滑か。赤茶褐色。

4 高坏

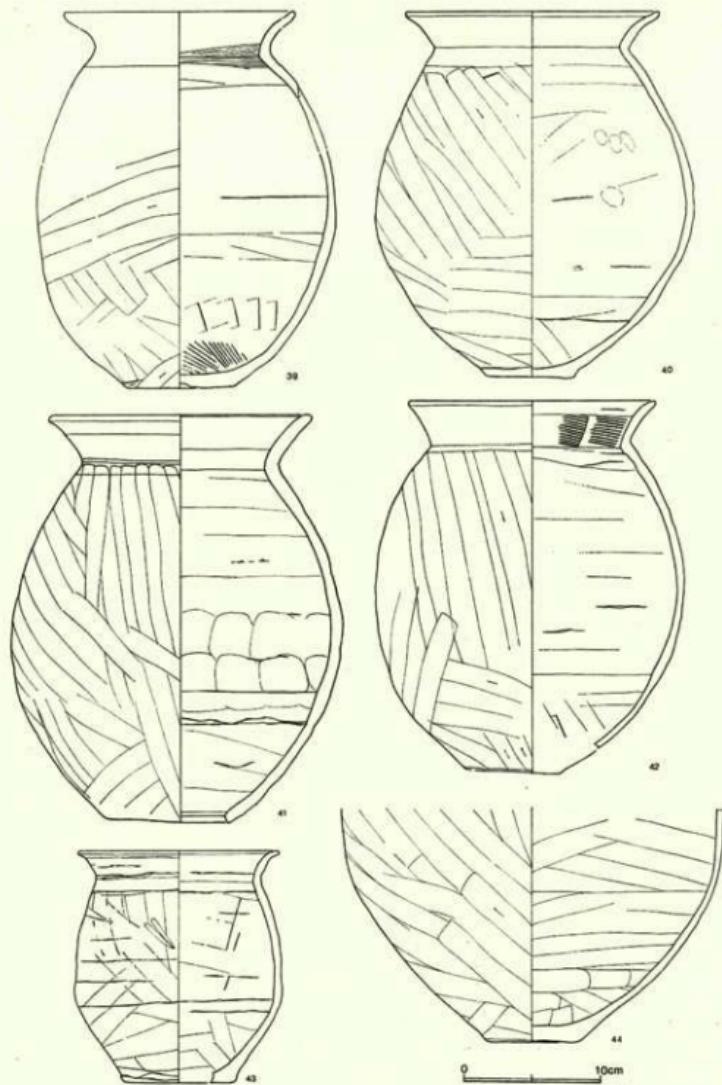
O I—9②類 27 (No. 25) 上部はほぼ完形。基準資料。赤形。



第82図 第40号住居跡出土遺物実測図(1)

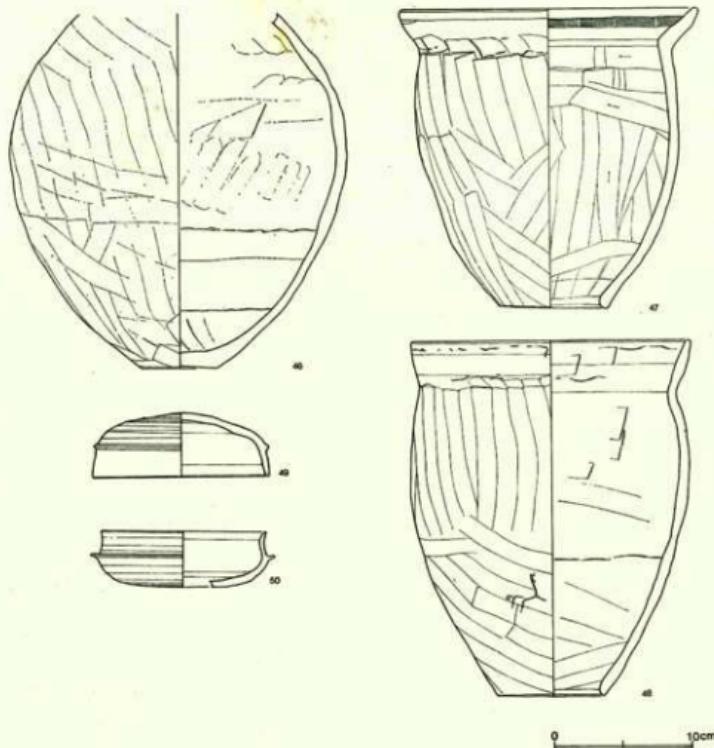


第83図 第40号住居跡出土遺物実測図(2)



第84図 第40号住居跡出土遺物実測図(3)

※番号は1つずれる 39→40



第85図 第40号住居跡出土遺物実測図(4)

O | —10類 29 (No. 4) ほぼ完形。基準資料。30 (カマド No. 1・C区) 壁部100%、裾部30%残。橙茶褐色。器面磨滅。28 (貯蔵穴・No. 2) 接合部100%、杯部と脚部45%残。焼成良。茶褐色。

5 鉢

O | —11類 26 (No. 28・D区覆土) 口縁部22%、底部25%残。基準資料。外面に炭化物付着。

6 小形壺

O | —12類 23 (カマド No. 1 A) 基準資料。口縁部の外頸が強くなる。体部上半の30%を欠く。24 (No. 20) ほぼ完形。焼成良。黒褐色、外面一部赤褐色。

O | —12②類 22 (No. 14) 口縁部40%を欠く。基準資料。内外面に煤付着。

O | —12③類 31 (No. 15) 底部100%、口縁部20%残。基準資料。橙赤褐色。やや軟質。

O | —13類 32 (No. 24) 形態はやや異なるが和泉期の様相を残したものとしてここに分類した。胎土は木目細かく、つくりも丁寧である。赤彩か？ 内面には接合痕が残る。

O | —16類 44 (No. 30) 最大径はやや下がり、口縁は一度開いて更に強く外反する。内面に煤付

着。焼きしまる。胴部100%、口縁部45%、底部10%残。

7 大形壺

O I—17類 33 (No. 7) 34よりもやや大きい。口縁部はやや短くなる。赤彩か？ 基準資料。

34 (No. 1) 口縁部100%、肩部70%残。茶褐色。黒斑。赤彩か？ 割れ口は磨られる。

O I—18類 36 (No. 31) ほぼ完形。茶褐色。基準資料。35 (No. 33・34) 40%残。茶褐色。45 (No. 33・34) 茶褐色。

8 壺

O I—19①類 46 (カマド中No. 2) 胴部70%、底部100%残。橙茶褐色。43 (No. 26・29) 口縁部30%、胴部90%、底部5%残。橙～茶褐色。41 (No. 29) ほぼ完形。橙褐色。40 (カマド中No. 1 B) 頸部7%と胴部以下の図上復元。茶褐色。37 (No. 27) ほぼ完形。橙茶褐色。42 (カマド中) ほぼ完形。橙茶褐色。焼成後、底部を欠き周辺部を磨っており、瓶として使用したものと思われる。39 (No. 36) 約40%残。橙褐色。

9 瓶

O I—20類 48 (No. 28) 器高はやや高く、胴上位に最大径をもち、頸部で括れ、口縁部は立ち気味になる。砂粒の混入少なくもろい。軟質。明茶褐色。38 (No. 26) 20%残。淡黄褐色。

O I—21類 47 (No. 8・9) 完形。砂粒多くザラザラした感じ。基準資料。

須恵器

1 蓋 49 (No. 42) 卷上げ成形後ろくろによる整形。微、細粒砂、小石を少量含む。頂部には自然釉が付着する。

2 坯 50 (No. 48・C区覆土) 口縁部20%、底部45%残。やや軟質。灰色。

その他 36号住の74は註記のミスから36住に入っている。その後、40住の破片と接合したので当住居跡に属するものと考える。

第41号住居跡（第86・87図・図版21）

第4地点東側にあり、第43号住居跡に南側を切られている。なお、本住居跡調査中にカマド西側にカマドの残存部分と思われる、赤く焼けた部分を発見し、第42号住居跡とした。

形状は方形を呈するものと思われる。大きさは主軸方向が6.3mで、南北方向は南側を53号住居跡に切られており残存部分は4.0m。主軸の方向はN—76°—E。

カマドは東壁を50cm程掘込んでつくられており底は床面より僅かに低くなつておらず、舟底状を呈し、ゆるやかに立上がり、1m×43cmの長大な煙道へ続く。袖は北側が残っており、河原石を補強にし、褐色土で構築されていた。床面は平坦である。壁高は東側で38cmではば垂直に立上がる。

遺物はカマド脇から坏1、台付壺脚部27、土錠34が床面からやや浮いた状態で出土している。

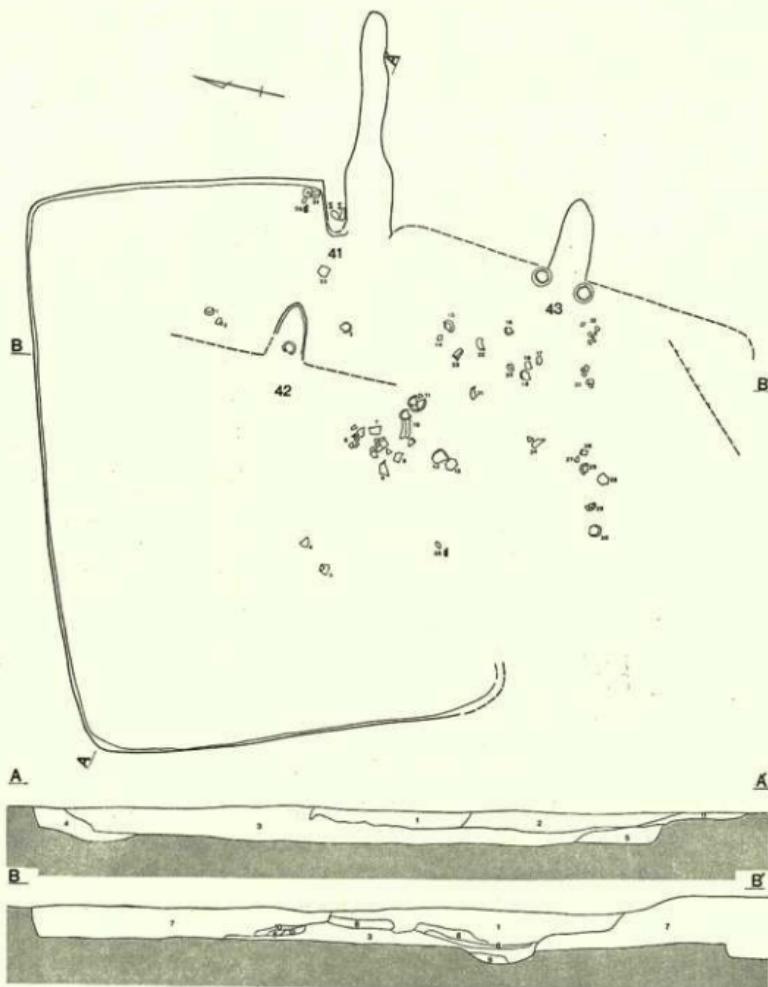
第41号住居跡出土遺物（第89・90図・図版57）

鬼高IV期に属する。

土器部

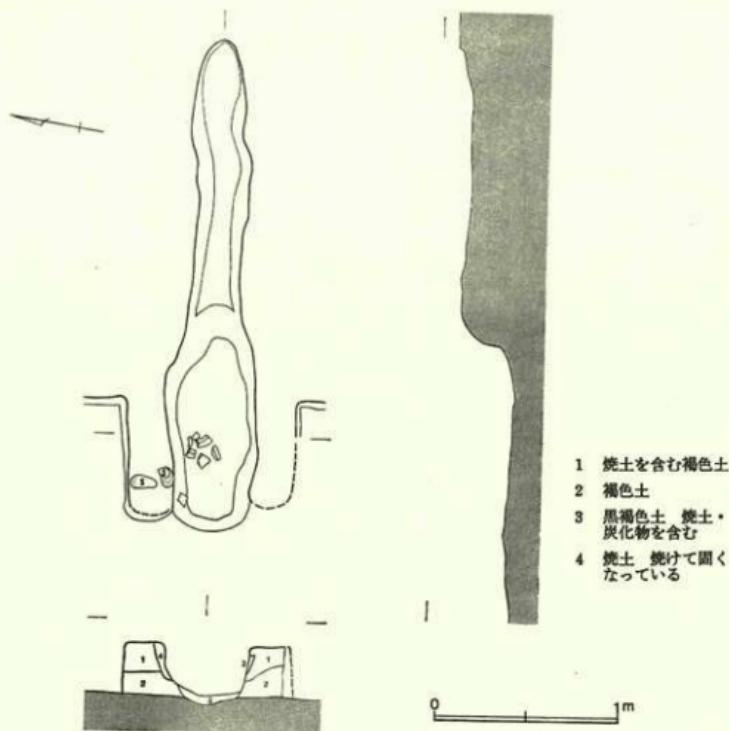
1 坯

O IV—3 ①類 1 (41・42・43住No. 34) 30%残。胎土には角閃石、浮石、酸化鉄などの微細粒砂



- 1 黒色土中に炭化物・焼土が帯状に堆積
2 黒褐色有機質土 少量の炭化物を含む。
3 茶褐色土 4 褐色土 5 カマド油
6 黒色土中に黄褐色土を含み粘性がある。 7 淡灰褐色土 炭化物・焼土粒子を含む。
8 炭化物層 9 褐色土 軟質粘性がある。 10 焼土 焼けて堅くなっている 54住カマド
11 焼土 ブロック状に堆積 12 灰層

第86図 第41・42・43号住居跡実測図



第87図 第41号住居跡カマド実測図

の他に、細粗粒砂を含みやや粗い感じ。焼成比較的良い。黒色処理が内外面になされる。

O IV:-6類 3 (41・42・43住C区覆土) 12%残。口唇部荒れる。二次加熱のためか、暗茶褐色となり、口縁部外面朱色を呈する。

O IV:-4②類 2 (41住カマド) 38%残。胎土は精製され、淡黄～橙褐色を示す。焼成は比較的良い。

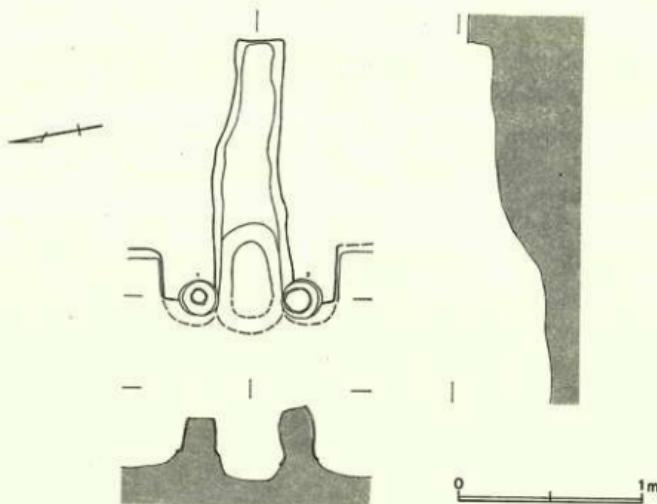
2 台付甕

27 (41・42・43住No.34) 捩部 100%、接合部45%残。胎土には、角閃石、酸化鉄、浮石などの細粗粒砂を多含。ザラザラした感じ。二次加熱のため器表荒れる。淡黄～暗褐色。

須恵器

蓋

30 (41住) 接合しない2片より成り約30%残。微、細粒砂を含み焼成良。灰色。大形でかえりは鋭い。



第88図 第43号住居跡カマド実測図

第42号住居跡（第86図・図版21）

第4地点南東側にあり第41・43号住居跡と切合っている。第41号住居跡調査中に発見されたものであるが、カマドの底の赤く焼けた焼土部分のみが確認されており、この部分から杯4が出土している。

第42号住居跡出土遺物（第89・90図・図版57）

鬼高Ⅳ₂期に属する。

O IV₂-1②類 4（カマド内）口縁部25%を欠く。梢円形を呈する。

第43号住居跡（第86・88図・図版22）

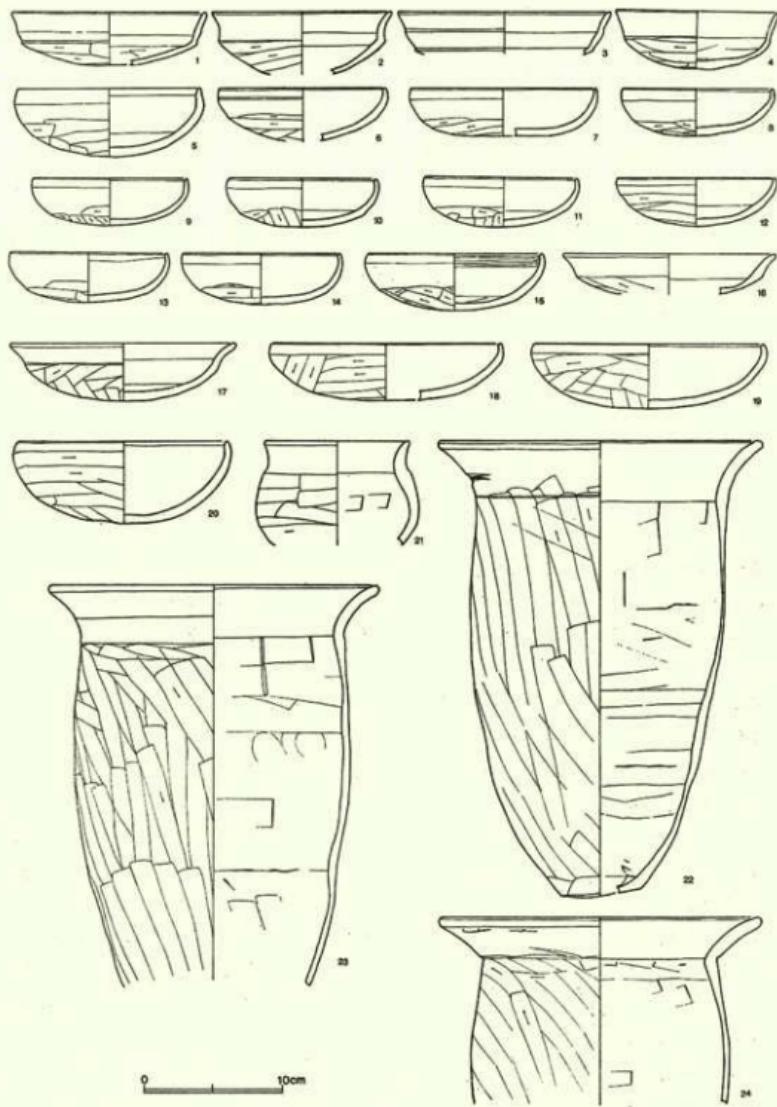
第4地点南東側に位置する。非常に土層の判別しにくい地点にある為、カマド以外の立上がりは不明で、遺物の出土範囲を住居跡の範囲とした。第41・42号住居跡を切っている。又、南側には更に別の遺構があるがこれとの関係は不明。

カマドは東壁をやや掘込んでつくられており、底からゆるやかに立上がって98cm程の長さの煙道へ続く。袖は土師器長甕を芯にして地山のロームをもって構築されていた。床、壁等は不明。遺物はカマドの袖に芯として使われた甕22・23があり、他に覆土中から杯5・7・9・14・15・17~20甕25・鉢26・須恵蓋29・壺31・土錐35が出土しており、本遺構に属するものと思われる。

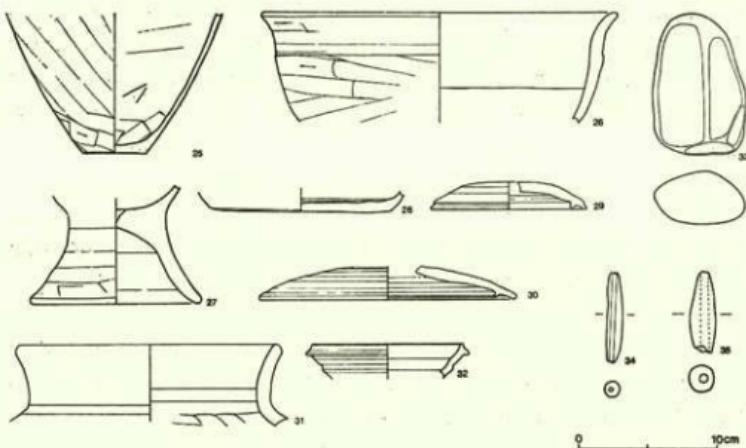
第43号住居跡出土遺物（第89・90図・図版58）

真間第Ⅰ期に属する。

土師器



第89圖 第41·42·43號住居跡出土遺物實測圖(1)



第90図 第41・42・43号住居跡出土遺物実測図(2)

1 壺

M I — 2 類 6 (B区覆土) 25% 残。橙褐色。底外面に黒斑。口径 12.0cm。7 (No.25) 30% 残。橙褐色。15 (No.30) ほぼ完形。橙褐色。

M I — 3 類 5 (No.30) 口縁部 20% 欠く。赤茶褐色。底外面と体部内面褐色。微細粒砂に小石を少量含む。焼成は比較的良いが、重量感がある。20 (No.13・B区覆土) 口縁部 30%、底部 70% 残。橙褐色。

M I — 4 類 8 (No.3) 60% 残。茶褐色。底外面黒色。9 (No.18) 約 53% 残。器内面荒れ細い剥離が全面にわたる。橙褐色。外面淡橙褐色。10 (No.1) 48% 残。焼成は非常に良い。橙褐色。11 (No.11・12・トレンチ B C F) 80% 残。橙褐色。外面に黒斑。12 (No.24) 30% 残。胎土は 3 類に似て焼成やや甘い。器外面荒れる。茶褐色。13 (トレンチ) 75% 残。内外面磨滅。橙褐色。底部外面黒色。14 (No.28) 口縁部 35%、底部 60% 残。暗橙褐色。

M I — 5 類 18 (No.11) 24% 残。器内面磨滅。橙褐色。外底部、灰褐色。19 (No.11) 40% 残。内外面とも磨滅。淡橙褐色。外面一部灰褐色。

M I — 6 類 16 (P₁区) 20% 残。胎土は 3 類に似る。軟質。暗橙褐色。あるいは鬼高Ⅳ期の 42 号住のものとも考えられる。17 (No.27) 58% 残。橙褐色。

2 鉢

26 (No.7) 7% 残。胎土は小形壺と同じ。焼成は非常に良い。橙褐色。

3 小形壺

M I — 8 類 21 (トレンチ B C F) 25% 残。小形で器内厚い。胎土、焼成は基準資料と同じ。外面黒褐色、内面淡橙褐色。

4 壺

M | —11類 24 (No. 8 + 31 + B区・B区覆土) 口縁部95%、体部23%残。内外面磨滅。

M | —12類 22 (43住・カマドNo. 1) 縁部40%を欠く。橙茶褐色、外面上半、黄～暗茶褐色。23 (43住・カマドNo. 2) 口縁部30%と底部を欠く。胎土には大粒の酸化鉄目立つ。その他は22と同じ 内面は滑らか。橙赤褐色、外面一部黄褐色～黒褐色。25 (No. 9) 底部のみ27%残。内面赤茶褐色、 外面黄褐色。

須恵器

1 坯

28 (トレンチ 4 B) 底部のみ30%残。胎土には酸化鉄などの微細粒砂と、小石を少量含む。軟質。 灰褐色。ろくろ整形。底部は回転箄削り。

2 蓋

29 (No. 9) 13%残。小形で長いかえりを持ち、外面に段をもつ。胎土には細～粗粒砂を混入する。 烧成良。灰黑色。外面に自然釉付着。30 (41住) 約30%残。接合しない2片。微～細粒砂を含み、 烧成良。灰色。大形でかえりは鋭い。41号住に属するものである。

3 壺

31 (No. 12) 肩部～頭部25%残。細粗粒砂を多く含み、小石少量混入する。焼成良。暗灰青色。口 縁部は剥落し、磨滅する。

4 横瓶

32 (A区覆土) 12%残。胎土は非常に密。焼成も良くしめる。胎土は明灰色、釉薬は明緑色。

その他の遺物

1 磨り石

33 (トレンチ F) 完存。石質泥岩。

2 土錐

34 (No. 36) 完存。7g。細身で、胎土、焼成とも非常に良いもの。淡橙褐色～淡褐色、両端切り落 し。35 (No. 35) 一端を欠く。17g。太く大形。胎土には酸化鉄が目立つ。焼成は34よりも甘い。暗 茶褐色。

第44号住居跡（第91・92図・図版22）

第4地点南側にあり第45号住居跡を切っている。

形状は北側が不明であるが、南西隅のやや丸い長方形を呈するものと思われる。

覆土は暗褐色土を主体とするが、第45号住居跡との境ははっきりしない。

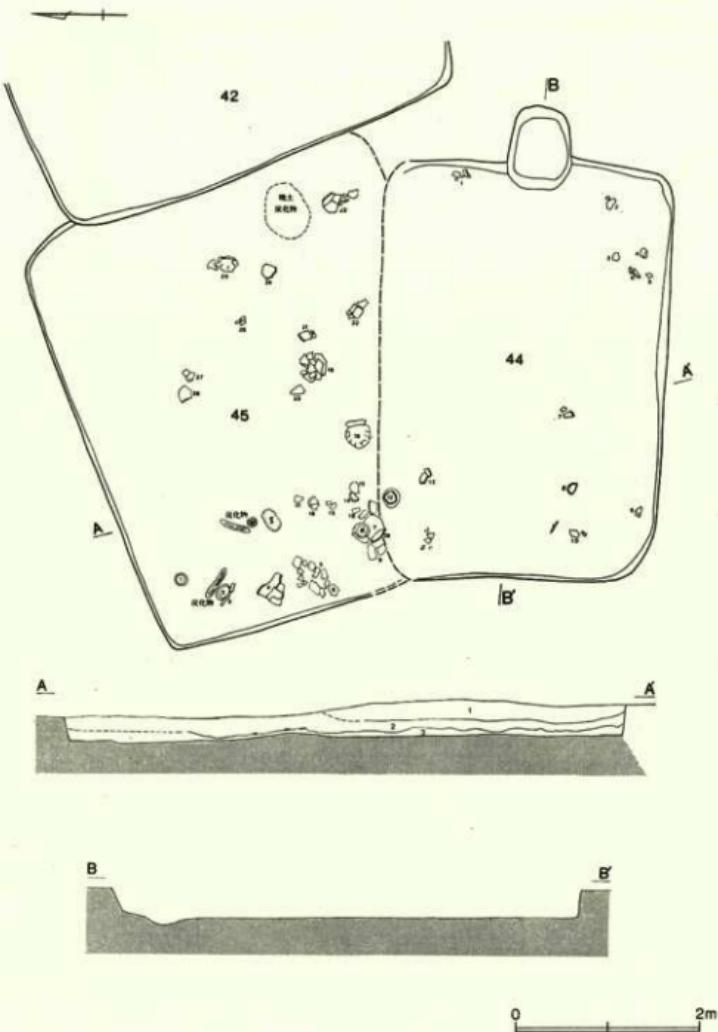
大きさは4.5×(3.1)m。

主軸の方向はN—92°—E。

カマドは東壁中央部の壁を60cm程掘込んでおり底は舟底状で一部は床面よりやや低く、まっすぐ に立上がる。壁は焼けて赤変している。袖はごく一部が残っていた。

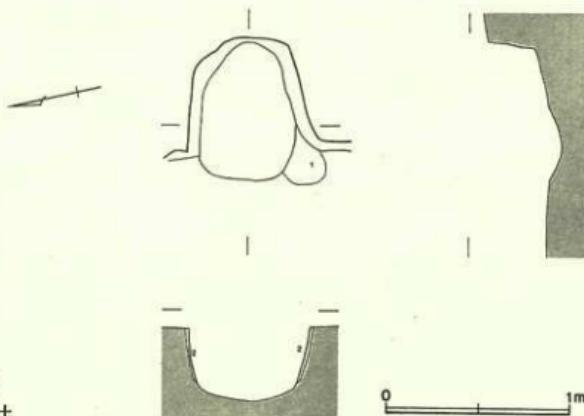
床面は平坦で堅いが第45号住居跡寄りははっきりしない。壁高は東側で30cmではば垂直に立上が る。

遺物は壺1、壺3が床面から、他は覆土中の出土である。

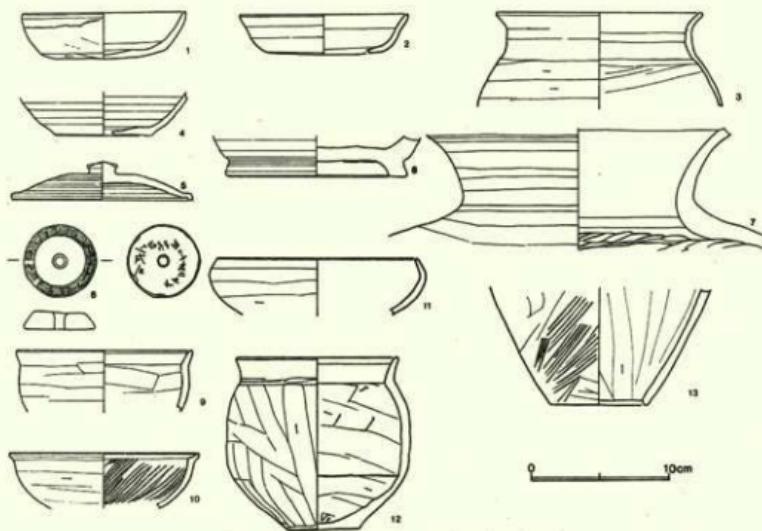


- 1 暗褐色土 粘土を多く含み炭化物、焼土を含む。特に2層との境に顯著。
- 2 暗褐色土 炭化物、焼土を多く含む。
- 3 暗茶褐色土 1層に似るが黄色味が強くロームブロックを多く含む

第91図 第44・45号住居跡実測図



第92図 第44号住居跡カマド実測図



第93図 第44号住居跡出土遺物実測図

第44号住居跡出土遺物（第93図・図版58）

国分第Ⅱ期に属する。

土器

1 壺

KⅡ-1類 1 (No.4・5・6) 口縁部25%を欠く。基準資料。暗文はない。

KⅡ-2類 2 (D区) 25%残。基準資料。黄褐色。

2 壺

KⅡ-6類 3 (No.1) 約25%残。基準資料。橙褐色。外面黒褐色～黒色。

須恵器

1 壺4 (D区) 35%残。微～細粒砂と小石少量を含む。焼成良。暗灰色。ろくろ水挽成形。底部には時計回りの回転糸切り痕。

2 盖 5 (覆土) 20%、裾部8%残。つまみ端部を欠く。微細粒砂含み焼成良。内外面に自然釉付着。暗灰青色。

3 壺 6 (No.8・B区) 60%残。微～細粒砂と小石少量含む。焼成良。灰色。7 (B区) 60%残。肩部と頭部の接合部は肥厚する。微～粗砂を含み密。焼成良。暗灰色。頭外面暗灰青色。肩部にはおさえ痕、頭部下端内面は木口状工具による横ナデが一周する。

紡錘車

8 (セクションA-A'中) 完形。57g。滑石製。文字が線刻されている。「天安二年十二月二八日工戍人(戊午?)」磨って面取された斜面には「墨戈」。天安二年-856年、戊午-836年。

その他の9～13までの遺物は、鬼高Ⅰ期の45住のものである。

1 壺

OⅠ-4③類 9 (覆土) 20%残。器面磨滅。橙茶褐色。

OⅠ-4①類 10 (覆土) 35%残。内面は磨かれ、暗文が施される。内黒で口唇外面約1mmまで黒色となる。外面は橙褐色を呈する。

OⅠ-5②類 11 (覆土) 20%残。外面赤茶褐色、口縁一部黒色、内面茶褐色。

2 小形壺

OⅠ-16類 12 (No.5・45住No.28) ほぼ完形。内外面とも口縁部横ナデ整形後、笠ナデつけされる。内面は器面粗いが黒色処理される。外面は橙茶褐色。

3 瓶

13 (C区覆土) 20%残。微～粗粒砂を含み、焼成良。内面茶褐色、外面黒色、下部橙褐色。外面に刷毛状工具によるナデつけが施される。

第45号住居跡（第91図・図版22）

第4地点中央部に位置し、第42・44号住居跡に切られている。

覆土は炭化物・焼土を多く含む暗褐色土で、下層ではロームブロックを含み、黄色味が強くなる。本住居跡は火災を受けており、床面付近には炭化物等が多く、北西隅付近に炭化材が検出されている。

形状は方形を呈するものと思われる。

大きさは4.8×(4.1)m。

主軸の方向はN-65°-E。

カマドは54号住居跡に切られた側に存在したものと思われ、焼土と支脚に使われた土器があった。

床面はほぼ平坦である。壁高は北側で25cmでほぼ垂直に立上がる。

遺物は住居跡内の各所から出土しているが塊1、甕14、16、17、瓶18はほぼ床面上から、そして塊2、高杯10、11はカマドの支脚として使用されたものであろう。他は覆土中の出土である。

第45号住居跡出土遺物（第94・95図・図版58）

兎高Ⅰ期に属する。

土器

1 塊

O I-4②類 2 (No.11・13・14・15・カマド支脚) 70%残。基準資料。

O I-5①類 4 (No.10・14) 30%残。丸底風。明赤褐色。6 (No.29) 完形。赤褐色。

O I-5②類 3 (No.13) 60%残。橙赤褐色。7 (No.20) 30%残。茶褐色。

2 塊

O I-6類 1 (No.1) ほぼ完形。基準資料。

3 高杯

O I-10類 10 (No.8) ほぼ完形。橙茶褐色。11 (No.8・11・カマド支脚) 75%残。橙茶褐色。

外面に暗文風範磨き。両者とも杯底径が広くなり、口唇部は内湾する。脚部のふくらみは小さくなる。

4 小形壺

O I-13類 12 (No.2) 80%残。胎土は砂粒多含し、焼成は良い。基準資料とは材質やつくりが異なるものであるが、胴部球形で口縁部は2段口縁風となり、古い要素をもっているということでのこの類に入れた。橙褐色。

O I-14類 8 (No.10) 20%残。基準資料。

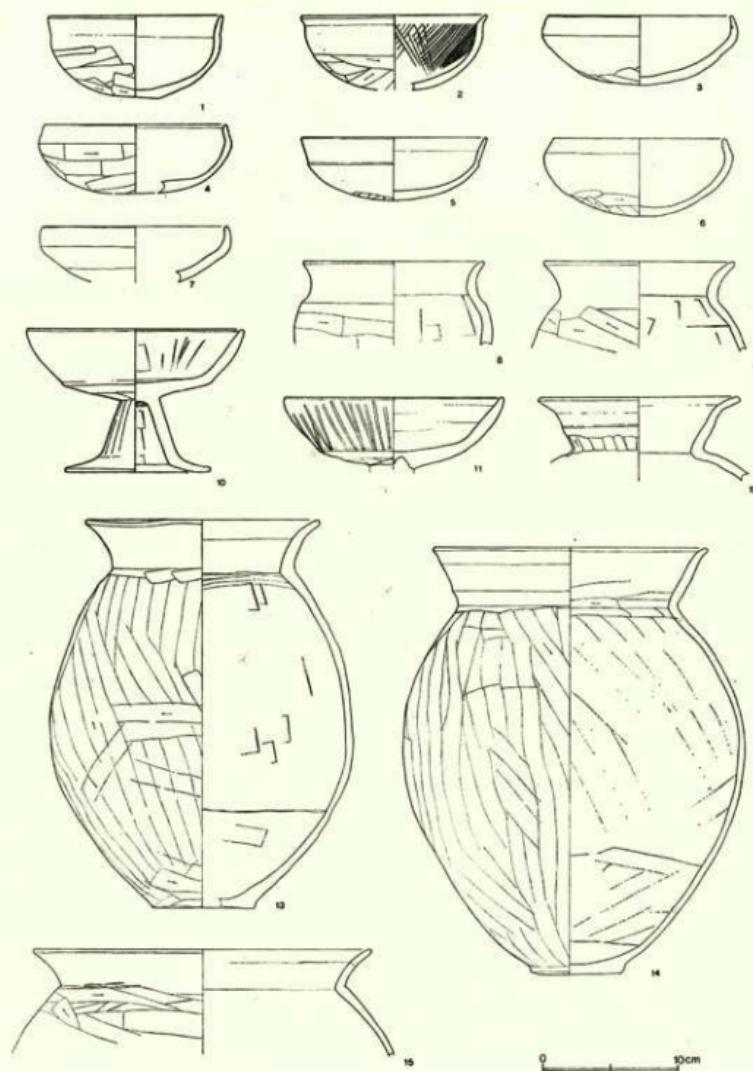
O I-15類 17 (No.7) 胴部40%を欠く。基準資料。9 (No.7) 20%残。肩部はやや張り出し、口縁部は外反する。茶褐色。

5 瓢

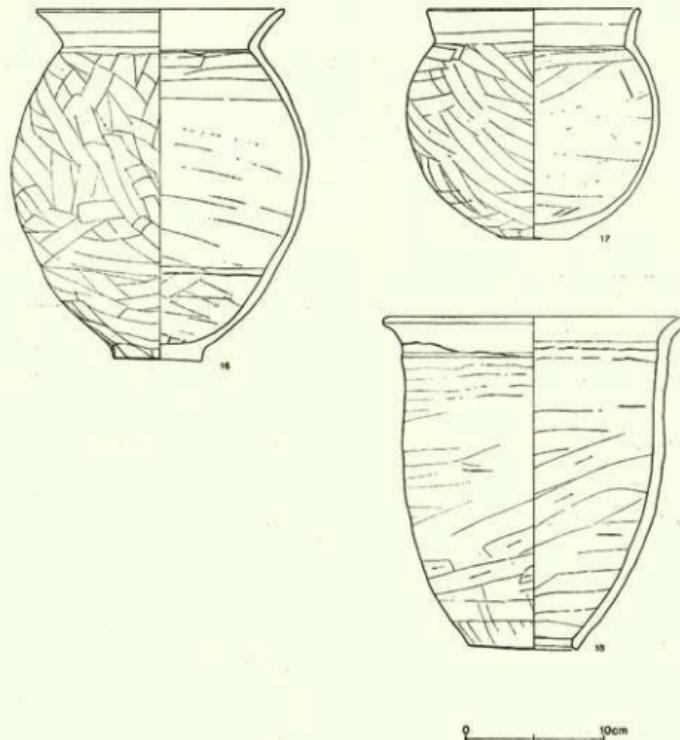
O I-19①類 14 (No.5) 口縁部40%を欠く。基準資料。16 (No.19) 小形。口縁部は「く」の字状に開く。茶褐色。焼成非常に良い。黒斑。口縁部25%、胴下半部30%を欠く。13 (覆土) 最大径は胴中位よりやや下にある。口縁部は「ハ」の字状に開く。ほぼ完形。15 (No.23) 30%残。胴部は球形になると思われる。頸部の径は広く、口縁部は「く」の字状に開く、あるいはもう一類ふやすべきかもしれない。同期31住6にも類例がみられ、系列のおえるものである。器肉は薄く、つくりは同じである。肩外面は横斜位の剃削りが施される。

6 瓶

O I-20類 18 (No.4) ほぼ完形。基準資料。この他に図示しなかったが、同タイプの瓶が2個



第94圖 第45号住居跡出土遺物実測図(1)



第95図 第45号住居跡出土遺物実測図(2)

体ある。その内一つは内外面粗く磨かれ、赤彩が認められた。

7 その他

坏5は、手造りにより表採のものが混入した。

第46号住居跡（第96・97図・図版23）

第4地点西側にあり、北55mに第40号住居跡がある。炭火物、焼土が多く、火災を受けたものであろう。

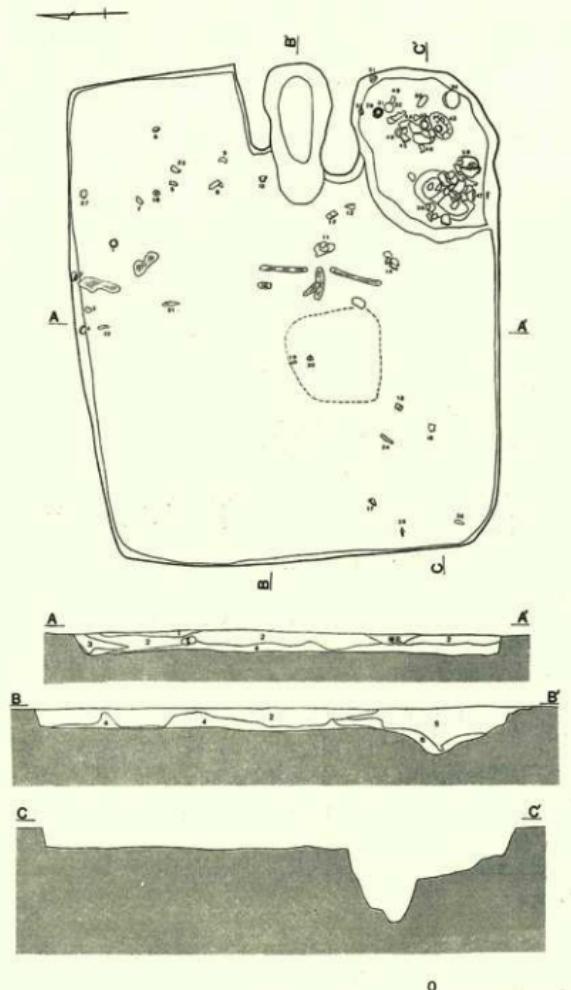
覆土は暗褐色土を主体とし、下層に多量の炭化物、焼土粒子を含んでいた。

形状は南東隅に丸味をもち、東西の主軸方向にやや長い長方形を呈する。

大きさは5.6×4.8m。

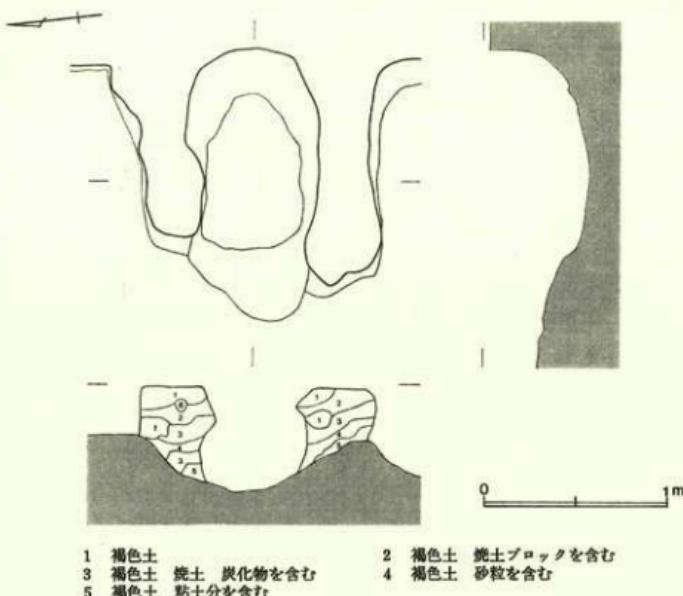
主軸の方向はN—90°—E。

カマドは東壁中央部よりやや南寄りにあり、底は床面より27cm程低く、舟底状を呈し、ゆるやかに立上がる。カマド内には多量の炭化物、焼土が堆積しスサを混入した焼土ブロックがあり、天井



- 1 褐色土 少量の炭化物・焼土・ローム粒子を含む
2 暗褐色土 少量の炭化物・焼土を含む
3 黒褐色土 炭化物・焼土粒子を含む
4 黑褐色土 多量の炭化物・少量の焼土を含む
5 暗褐色土 少量の炭化物・多量の焼土ブロックを含む
6 暗褐色土 少量の炭化物・焼土を含みやや暗い。

第96図 第46号住居跡実測図



第97図 第46号住居跡カマド実測図

部の落下したものと思われる。袖は褐色土を主体として構成されている。

ピットはカマド南側の隅に、 $70 \times 38\text{cm}$ の長楕円形の落ち込みがあり、周辺部も床面よりやや低い部分があり、多量の土器が出土しており、貯蔵穴と思われる。

床面は平坦で堅い。壁高は西側で 21cm ではほぼ垂直に立上がる。

遺物は貯蔵穴に集中しており壺2~10、13~15・16・18・20、須恵器甕33~35・37、横瓶36、坏38、又カマドからは甕28~32が出土した。又、北壁下の床面に流れ込むように壺11、須恵器40が出上し、紡錘車42~44、鉄器50~57、福物石46~49も床面上から出土したものである。なお壺4・7・16・17はカマド脇から重なって置かれたように出土した。

第46号住居跡出土遺物（第98・99・100図・図版60・61・62）

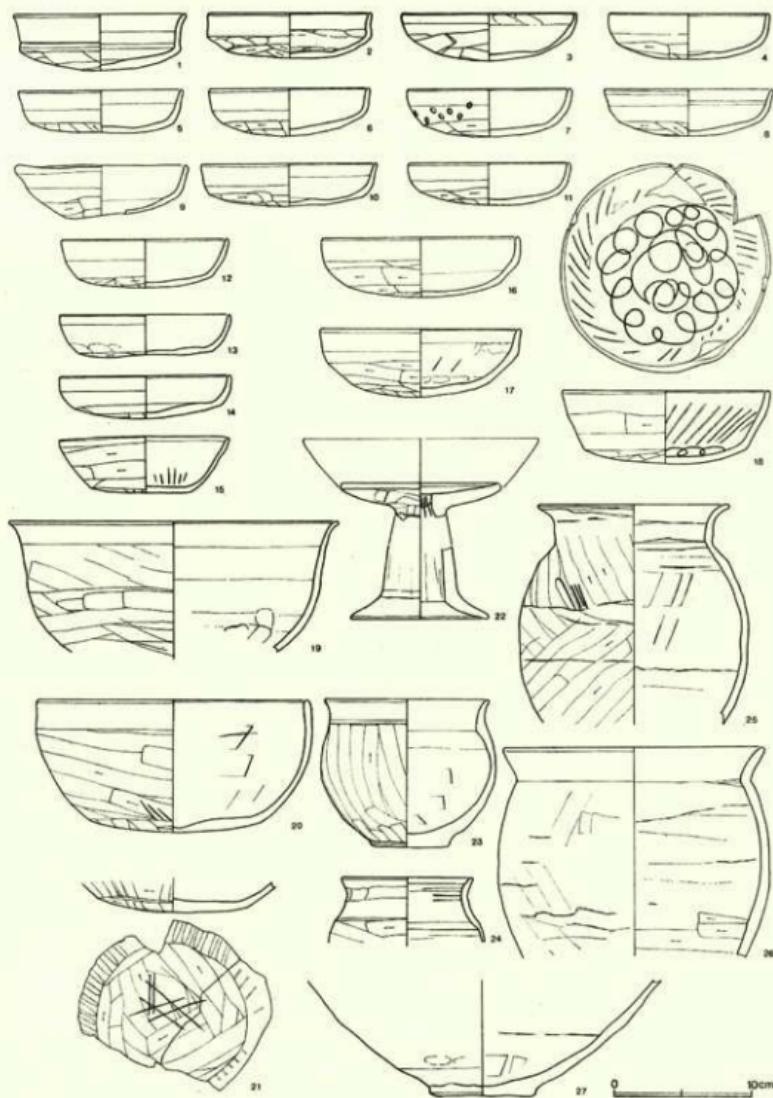
国分第Ⅰ期に属する。

土師器

1 壺

K | - 1 ①類 8 (No.52) 完形。基準資料。橙褐色。二次加熱によって黄~黒褐色を呈する。

K | - 1 ②類 11 (No.4) ほぼ完形。暗橙褐色。二次加熱により内面黒色~灰褐色を呈する。基準資料。7 (No.28) 完形。体部外面に竹管文状の円形の刺突文が施される。暗褐色、内面朱~灰黑色。6 (No.40) 完形。7と同様に竹管の刺突文が施される。淡橙褐色、内外面黒色~淡灰褐色を呈する。



第98図 第46号住居跡出土遺物実測図(1)

4 (No.29) ほぼ完形。橙褐色、外面黒色～淡灰色を呈する。2 (No.32) ほぼ完形。6と同じつくり。体部は大きく開き、口縁部は外反気味に直立する。口縁部橙褐色、底部内外面黒色。

K I-2 ①類 14 (No.31) ほぼ完形。内外面とも坏が重なっていたように、円形に橙褐色を示しその周囲を黒色、またその外周は灰～暗橙褐色となる。体部に竹管文が施される。

K I-2 ②類 3 (貯藏穴) 口縁部30%、底部45%残。基準資料。明橙褐色。底外面に黒斑。

K I-3 類 12 (第4地点) 60%残。橙褐色、口唇部一部黒色。基準資料。

K I-4 ①類 15 (No.33) 口縁部35%を欠く。基準資料。

K I-4 ②類 18 (No.51) ほぼ完形。一部内外面荒れる。

2 盆

K I-5 類 13(第2貯藏穴内) 口縁部45%、底部90%残。基準資料。橙褐色、口縁部内面一部黒色。14 (セクションベルト No.1) 口縁部30%を欠く。底部にはやや丸味をもつ。9 (No.14) ほぼ完形。2次加熱。高温のため弓が沸騰状態となり気泡が出来変形する。橙褐色～灰褐色。10 (No.48) ほぼ完形。口縁部は直立気味に僅かに開く形態となる。底部にはかすかに丸味をもつ。橙褐色。内面円形に灰褐色。5 (No.36) 90%残。僅かに径は小さいが、10と同じ形態なのでこの類とした。橙褐色。

K I-6 類 17 (No.30) 完形。基準資料。橙褐色。2次加熱のため、底部から体部にかけて内外面円形に黒色となり、部分的に灰褐色となる。

3 鉢

K I-7 ①類 20 (No.34) 完形。基準資料。21 (D区・ピット No.5 一括) 底部のみ70%残。明橙褐色。底外面に箇書きで「井」と読める。図示しなかったが、貯藏穴内ピット No.2 から、口縁部と思われる破片が出土している。②類のようには外反しないが、「へ」の字状に聞く形態である。

K I-7 ②類 19 (ピット No.3 のセクション No.1) 口縁部3%、体部13%残。基準資料。

4 壺

K I-8 類 30 (カマド一括) 約15%残。基準資料。30よりも大形の34件4と同類の破片あり。32 (カマド一括) 45%残。橙茶褐色。33 (No.39) 約60%残。胎土、焼成9類と同じ。橙茶褐色～褐色、一部黒色。

5 小形台付甕

K I-9 類 24 (セクションベルト内) 24%残。基準資料。内外面磨滅。

6 壺

K I-10 類 29 (カマド一括) 約30%残。基準資料。

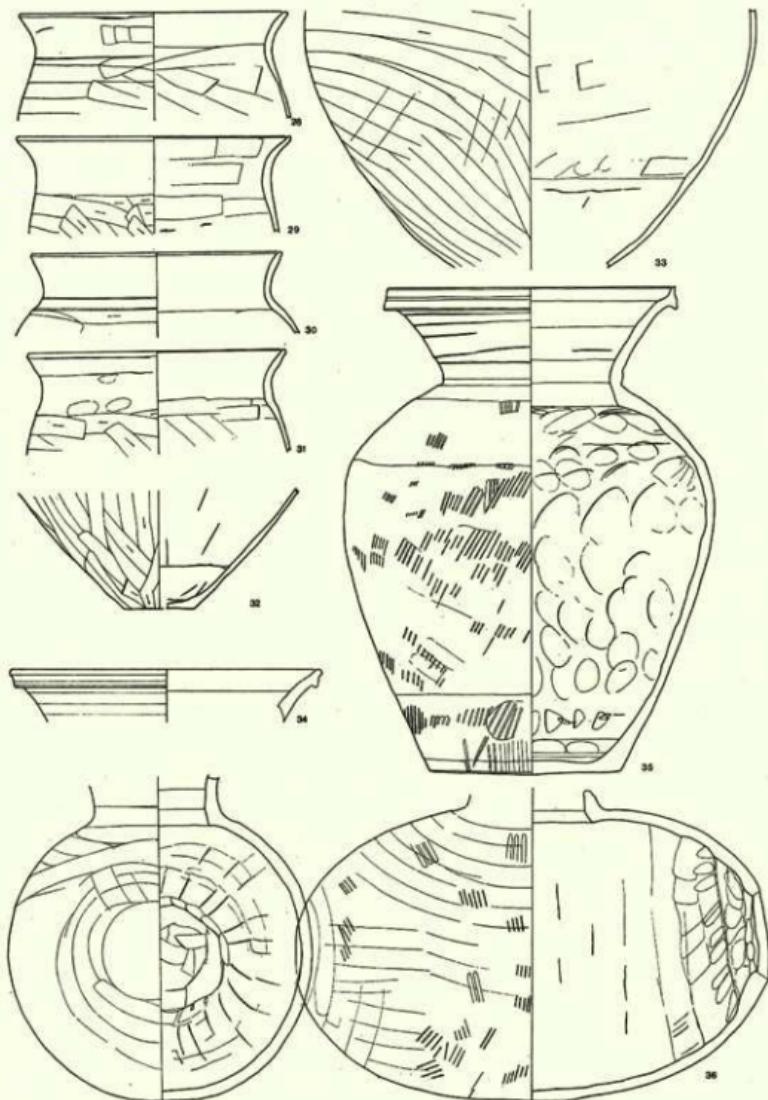
K I-11 類 28 (カマド一括) 約30%残。基準資料。

K I-12 類 31 (カマド一括・No.49) 約40%残。基準資料。

7 その他の土器

1, 22, 23, 25, 26, 27は、M I 期に属する遺物である。

1 (N 5 レンチ) 坏 90%残。明橙褐色。焼成良。22 (No.27) 高坏 上部40%，下部10%残。橙茶褐色、やや軟質。23 (No.43) 小形壺 胎土密。小石少量含む。焼成良。48%残。淡黄褐色。燒



第99圖 第46號住居跡出土遺物実測図(2)

成やや甘い。26(B区)小形壺 15%残。淡橙褐色厚手。やや軟質。27(№44)大形壺 30%残。胎土粗い。焼成良。内面黒色、外面明橙褐色。黒斑。

須恵器

35(№42)壺 ほぼ完形。胎土には白色針状物質を多く含む、その他石英の細～粗粒砂を少量含む。焼成良。頸部と胴部は手押さえタタキによってタタキしめられる。タタキ後粗く箒ナデされる。頸部は横ナデ。外面底部からの立ち上がり部は箒削りされる。暗灰色。部分的に黒色。34(№44)壺 9%残。東海系のもの。淡灰色。焼成良。外面に自然釉が付着する。36(№43)俵瓶 頸部以上を欠くがほぼ完形。第99図の向って左側を下に巻き上げ右端でふさぐ、頸部は外側から内側に向って開けられたものと思われる。胎土には、角閃石、浮石などの散粒砂と、片岩などの粗粒砂～小石を含む。焼成は35より甘く軟質。手もタタキ後、初めは縦位に、次に頸部にそって横ナデされる。外面灰黒色～暗灰色、内面明茶褐色。37(№44・貯藏穴・№2・A区覆土)大形壺 肩部以上を欠くがほぼ完形34はこの口縁部とも考えられる。胎土、焼成とも34と同じ。内面にはタタキのあと具(もしくは手?)と思われる痕跡があるが、外面は刷毛状の工具で丁寧にナデられ、光沢をもち、タタキ目痕は消される。明淡灰色。肩部外面と底部内面に自然釉付着。38(№35・47号住№1)壺 口縁部55%を欠く。ろくろ水挽き成形。底部は回転糸切り後、周辺と体下端部を回転箒削り。微、粗粒砂含む。暗灰色。39(№46)壺 13%残。散細粒砂含む密。焼成良。内面暗灰色、外面淡灰青色。ろくろ水挽き成形。外底部内側には粘土が付着し周辺箒削りもしくは箒おこしによるものと思われる。40(№2)高台付壺 小形。胎土には微～細粒砂を多含し、ざらつく。焼成良。口縁部内側と体部外側には鉄釉(自然釉?)が付着する。内面灰色、外面灰褐色。

紡錘車

42(№18)石質滑石。短径の面は孔を中心にして、中位すりへる。斜面部分には、キズとも文字ともつかないものが無数につく。「天」の一字が判読できた。黒色で光沢をもつ。96g。稜は丸くなる。43(№19)石質滑石一部片岩風。残りは黒色。稜は明確なものである。短径面に「井」の文字が判読できた。57g。44(№21)石質滑石。黒色で光沢をもつ。42と同じ。稜はほとんど丸くなる。斜面部分に「大」の文字が4つと、「切?」の文字が反転して判読できた。62g。

軽石

45(№27)93g。2～3mm大の角閃石を含む浮石。全面磨られて丸くなる。両面にきり状の工具で穿孔される。

織物石

46(B区覆土)石質 緑泥片岩。105g。半欠品。図の下面是欠損部である。緑色。

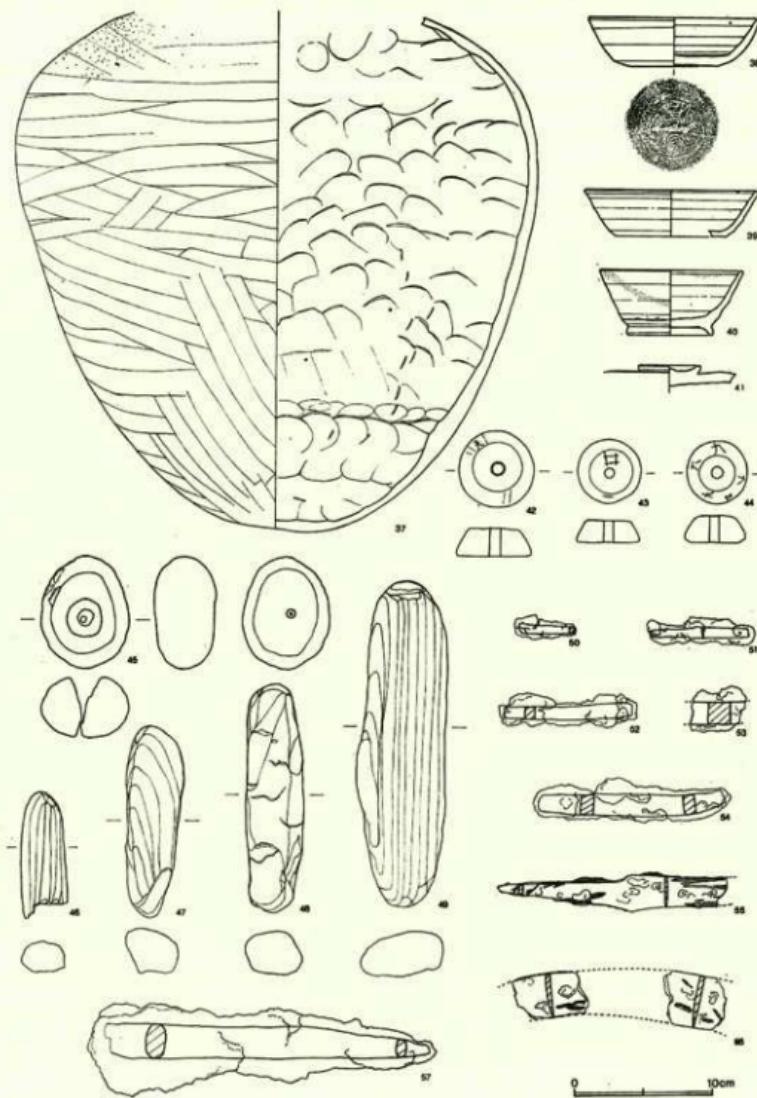
47(セクションベルト)石質 細雲母片岩。255g。一部を欠くが大きさには影響しない。

48(O区)石質 石英を含む砂岩。397g。若草色。全面磨られる。

49(セクションベルト)石質 細雲母片岩。789g。大形。全面磨られてまるくなる。

鉄製品

50(B区覆土)釘か?著しい銹化のため用途は不明、両端部は共に折れ口と思われる。断面はほぼ正方形を呈する。残存長44.5mm、幅5.3mm、厚さ4.3mm。



第100図 第46号住居跡出土遺物実測図(3)

51 (セタシヨンベルト中) 刀子 全面鋸化が著しく、原形を知ることは困難である。棟間、刃間とみられる箇所があることから、切先、茎先を欠損する。棟間は弱く、刃間は直角となる。残存長、鋸を含めて、77.0mm、関付近の刃幅7.3mm、棟幅1.1mm。

52 (No.26) と 53 (No.21) は同一個体。鋸化著しく用途不明。断面形は52で長方形、53ではほぼ正方形となり、棒状部分をもつ鉄製品の一部と思われる。52は残存長90.5mm、幅9.0mm、厚さ7.2mm。

54 (No.24) 鋸化が著しく器種不明、断面形は長方形を呈する棒状のもので、一方はやや湾曲し、端部は折れ口と思われる。残存長140.5mm、幅14.0mm、厚さ9.5mm。

55 (No.31) 刀子 比較的大形。茎部、刃部に木質を残す。刃部先端付近を欠く他は原形をよくとどめており、遺存状態も比較的良好。両関造りで茎先から関へと徐々に広がり、目釘孔は無いものと思われる。平棟平造り、残存長164.5mm。茎長91.0mm。茎部中央での茎幅12.5mm、厚さ5.6mm、関部での刃幅25.0mm、棟幅2.5mm。

56 (No.23) 錐 平棟造り、断面は刃付けの行なわれている側がやや半月形にふくらみ、反対側は扁平である。両面に植物質のものが付着している。装着部に近い側の断片(右側)は、比較的原形をとどめている。

57 (No.21) 鋸化が著しく器種は不明。太さは均一ではなく、一方がやすぼまり断面長円形を呈する棒状製品。両端部とも折れ口と思われる。50と同一個体か? 現存長25.2mm、幅24.5mm、厚さ13.5mm。

第47号住居跡(第101・102図・図版24・25)

第5地点北東側に位置し、南西7mに第48号住居跡がある。

覆土は暗褐色土で、壁際ではこれに炭化物・焼土を含むものであった。

本跡は火災を受けた為、床面近くに炭化材が多く見られ、又、直径15cm前後の自然礫が見られた。

形状は南壁がやや張り、四隅がやや丸味を帯びた方形を呈する。

大きさは4.6×4.5m。

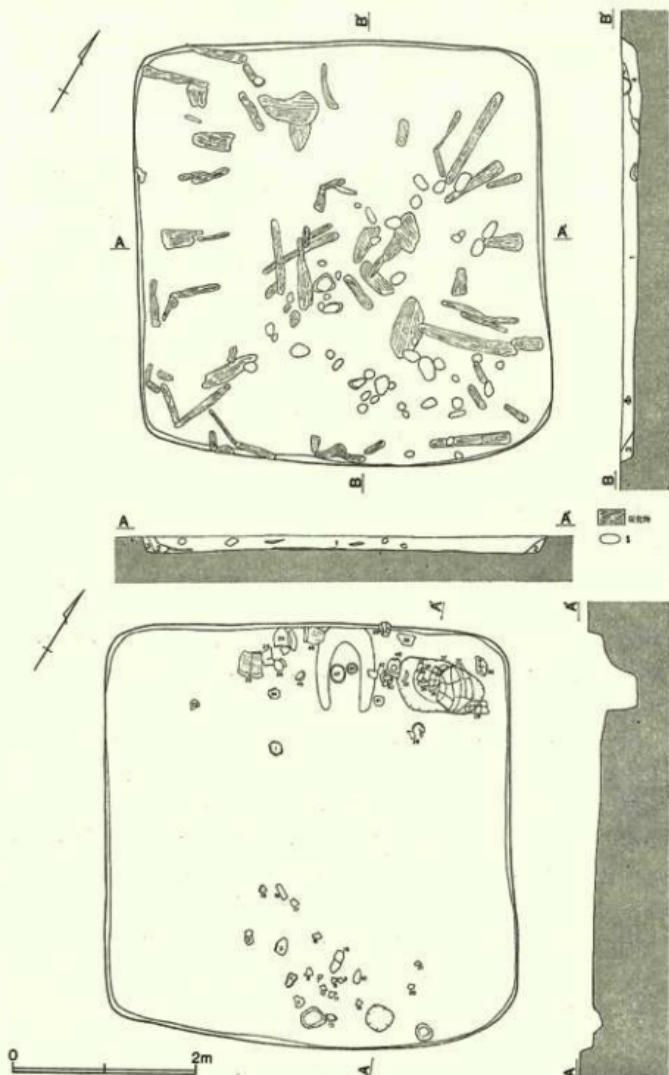
主軸の方向はN-32°-W。

カマドは北西壁の中央部やや東寄りにあり、床面を数cm掘り窪めて褐色土で構築されている。カマドの奥は北西壁に接している。又、中央部には壺が置かれており、支脚として使用されたものであろう。

ピットは2ヵ所検出されており、1個はカマド東脇にあり、97×56cmの方形を呈し、深さ34cmで、底は平坦で貯蔵穴と考えられる。

床はほぼ平坦で、壁高は18cmを測り、ほぼ垂直に立上がる。

遺物はカマドの支脚として使用された壺12・13、瓶10、壺2がカマドから、又、貯蔵穴からは壺1・3、瓶7が出土しており、床面上からは壺5・壺11・瓶14がカマド西側部分で出土しており、他はやや浮いた状態で覆土中から出土したものである。壺6はカマド付近から出土した。



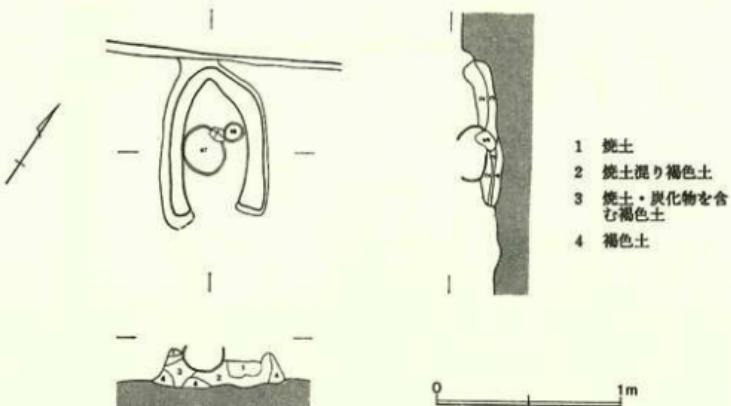
1 暗褐色土

2 焙土

3 暗褐色土 炭化物及び焼土を含む

4 カマド

第101図 第47号住居跡実測図



第102図 第47号住居跡カマド実測図

第47号住居跡出土遺物（第103図・図版63）

鬼高第Ⅱ期に属する。

土器器

1 坯

O I-1 ①類 3 (No.34・37) ほぼ完形。基準資料。1 (No.35) と 4 (No.26) は同一個体。口縁部50%、底部70%残。口径13.0cm、器高5.3cm。胎土は基準資料よりもやや砂粒多くザラザラした感じ。淡黄褐色。黒斑。赤彩。

O I-1 ②類 6 (カマド付近) 完形。基準資料。二次加熱のため、朱色～暗褐色となる。底部内面に炭素吸着。

O I-2 ①類 2 (No.48) 底部中央と口縁部60%を欠く。基準資料。

O I-2 ②類 グリッド-13 (47住No.34) ほぼ完形。基準資料。器形やや歪む。明橙褐色。

O I-3 類 5 (No.1) 接地面を僅かに欠くがほぼ完形。基準資料。

2 高坏

O I-4 類 9 (No.48) 接合部100%、裾部75%残。基準資料。

3 小形壺

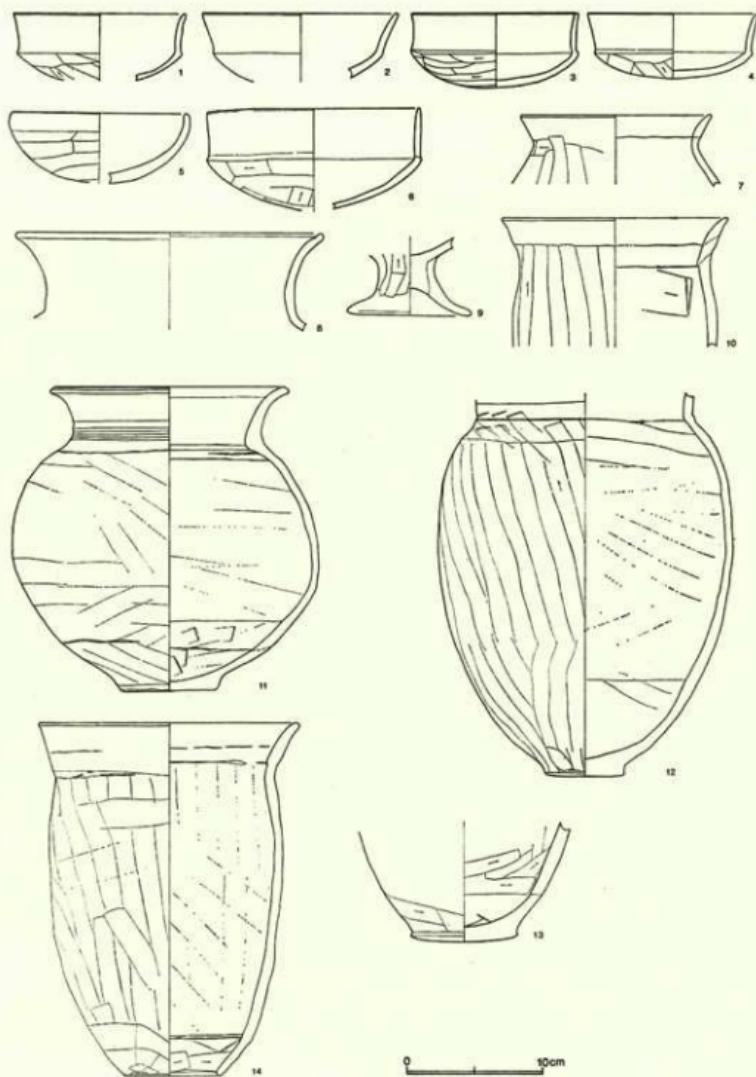
O I-5 類 13 (No.48) 底部のみ完形。基準資料。

4 大形壺

O I-6 類 11 (No.25・28) 上半100%、下半40%残。基準資料。8 (No.10) 口縁部100%残。淡茶褐色。その他、II-18類と同大の壺が2個体出土している。

5 壺

O I-7 類 12 (No.47) 底部100%、胴下半60%、上半40%残。基準資料。内面暗褐色、外面底



第103圖 第47號住居跡出土遺物實測圖

部付近黒褐色、胴部は赤茶褐色。

6 瓶

O II—8 類 14 (No.23) ほぼ完形。基準資料。

O II—9 ①類 7 (No.36) 30%残。基準資料。

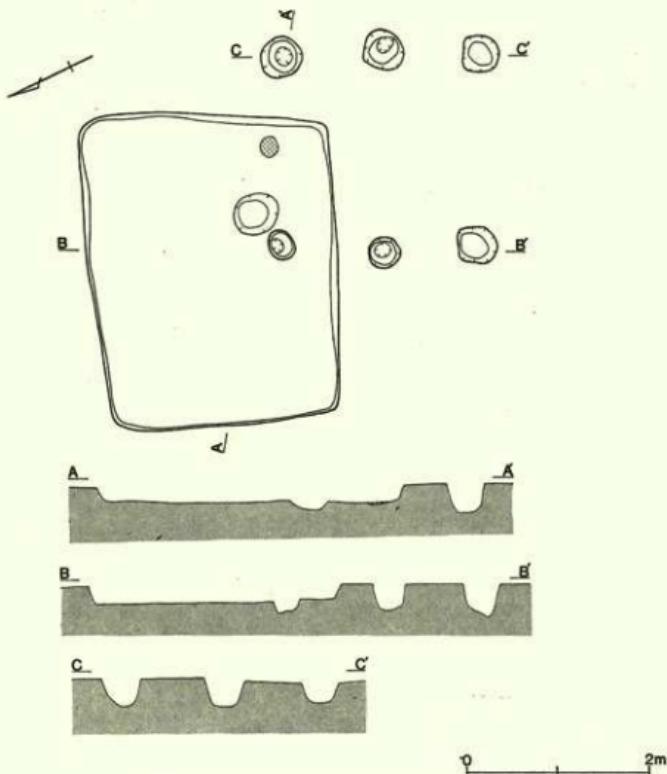
O II—9 ②類 10 (カマド床直) 20%残。基準資料。

第48号住居跡 (第104図・図版26)

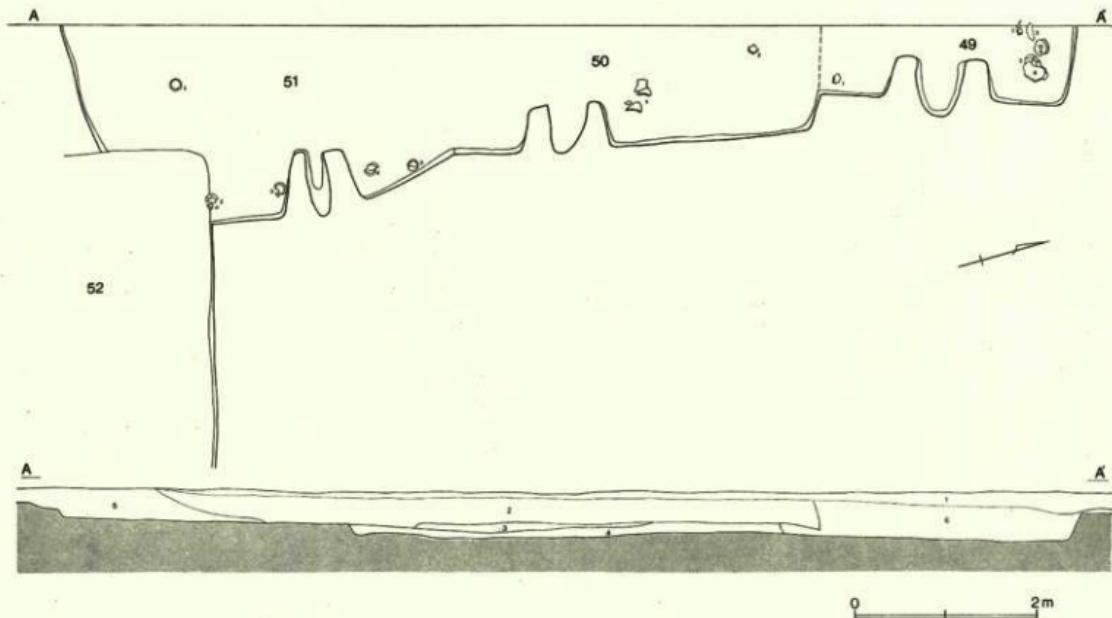
第5地点北側にあり、掘立柱建物跡と切合っている。形状は3.36m × 2.72mの東西方向に長く、北辺のやや長い長方形を呈する。主軸の方向はN-111°—E。

東壁南寄りの部分の床面に直径21cm、深さ2cm程の円形の焼土部分があり、炉跡かと思われる。

ピットはこの炉跡部分より中央寄りに浅い不整円形の落込みがあるが、一応本造構に伴なうものと考えられる。出土遺物はない。



第104図 第48号住居跡・掘立柱建物跡実測図



- | | | |
|--------------------|--------|----------------|
| 1 灰茶褐色土 | 2 淡褐色土 | 3 褐色土 粘土を含む |
| 4 褐色土(炭混り 少量の燒土混入) | | 5 茶褐色土 ローム粒を含む |
| 6 茶褐色土 | | |

第49号住居跡（第105図・図版26）

第5地点中央部に位置し、50号住居跡と切合っており、又、大部分は道路下にはいっていた為、全容は不明である。形状は北東隅から見て方形を呈するものと思われ、大きさは不明。

主軸の方向はN—109°—E。

カマドは東壁につくられており、底は床とほぼ同じ高さでゆるやかに立上がる。

床面はほぼ平坦である。壁高は北側で28cmでゆるやかに立上がる。

遺物は土師器坏2が覆土中から、平瓶1が床面上から廃棄された状態で出土した。

第49号住居跡出土遺物（第106図・図版63）

鬼高Ⅳ期に属する。

土師器

坏

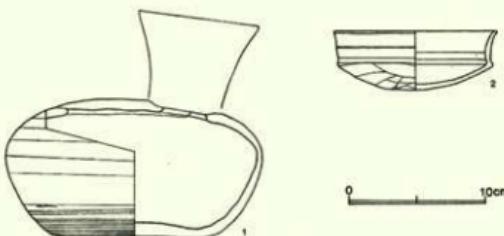
O VI-1 ②類 2 (No. 3) 口縁部45%を欠く。明橙褐色。

須恵器

平瓶 4 (No. 4) 体部上

半90%、下半30%残存。上面に直径9cmの穴を後からふさいだ痕が内面に残る。胎土には微細粒砂の他、石英の粗粒～小石を含む。焼成は普通。ろくろ整形。淡灰青色。

その他、図示しなかった



第106図 第49号住居跡出土遺物実測図

土師器に、1類31住5の系統の薄手の壺で、底部近くに焼成後、直径約7cmの円形に穿孔されたものがある。底部にはやや丸味を持つ。その他、小形壺IV-9類系の口縁部破片。稜をもたない丸形で赤彩された直径約12cm程の壺底部がある。

第50号住居跡（第105図・図版27）

第5地点南側にあり、第49・51号住居跡と切合っている。又、大部分は西側の道路の下になっていた為、調査は一部分に止まる。形状・大きさは不明。

カマドは東壁につくられていた。底は床面とほぼ同一レベルで、なだらかに立上がる。

床面はほぼ平坦で、壁高は東側で25cmを測る。

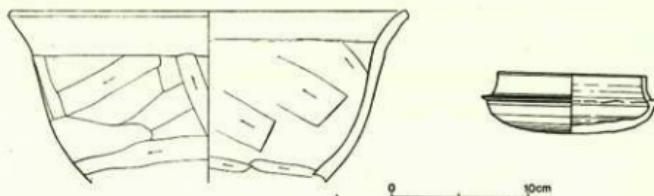
遺物はカマド北側の床面上から須恵器坏2が出土し、鉢1はやや浮いた状態で出土している。

第50号住居跡出土遺物（第107図）

鬼高第Ⅰ期に属する。

土師器

鉢 1 (No. 4) 口径29cm。胎土には角閃石、浮石、酸化鉄、石英などの微細粒砂を多含し、焼成良く焼きしまる。二次加熱によって淡橙褐色～茶褐色、黒褐色。



第107図 第50号住居跡出土遺物実測図

須恵器

壺 2 (床直) 底部は扁平。蓋受部はシャープである。胎土に細粗粒砂を僅かに含み、焼成も良く焼きしまる。暗灰青色、割口紫灰色。蓋受部に重ね焼き痕。自然釉付着。

第51号住居跡 (第105図・図版27・28)

第5地点南側にあり第50・52号住居跡と切合っている。又、造構の大部分は道路下に入っていた為、調査はカマド周辺部の確認に止まる。

形状・大きさは不明。主軸の方向はN—98°—E。

カマドは東壁につくられており、底は床面よりやや低くなっていた。

床はほぼ平坦である。壁の立上がりは8 cm程が確認できた。遺物はカマド周辺の床面上から、壺2～4が出土した。

第51号住居跡出土遺物 (第108図・図版64)

鬼高第IV₂期に属する

土師器壺

O IV₂-1 ②類 2 (No. 4) ほぼ完形。明橙褐色。3 (No. 2) 70%残存。明橙褐色。4 (No. 1) ほぼ完形。明橙褐色。

1は手造いで、59号住のものが、混入した。

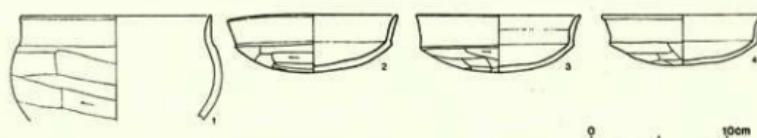
第52号住居跡 (第109図・図版29)

第5地点南側にあり、北には第51号住居跡があり、これと切合っている。

形状は主軸方向に長い長方形を呈する。

大きさは4.0m×2.8m。

主軸の方向はN—105°—E。



第108図 第51号住居跡出土遺物実測図

カマドは東壁中央部やや南寄りを68cm掘り込んでつくられている。底面は床面より8cm程低い。

床面はほぼ平坦で、壁高は西側で12cmを測る。

遺物は床面上中央部やや東寄りの部分から刀子、西壁中央部床面付近から壺1が出土している。

第52号住居跡出土遺物（第110図・図版64）

国分第Ⅰ期に属する

土師器壺

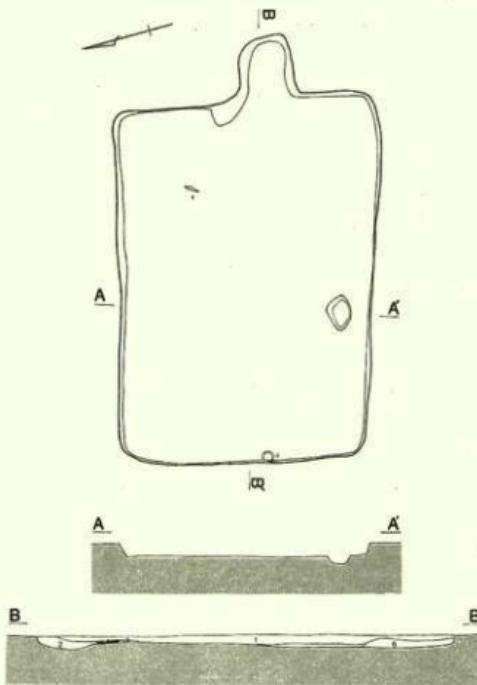
K I-3類 52-1 (No. 2) 95%残。橙褐色。

須恵器

2 (セタシヨンD) 8%残。灰色。微細粒砂を含み焼成良。M II期のものと思われる。

鉄器

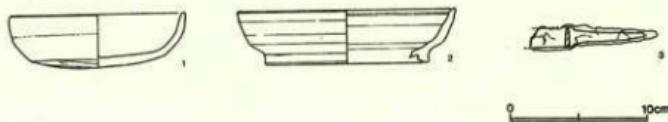
3 (No. 4) 刀子は本期に属するものである。銹化著しく、形状はわかりにくい。刃部大半を欠く。目釘孔はない。両関形ではば直角となる。平棟造りと思われる。残存長92.0mm、茎長49.5mm、関付近での刃幅12.5mm、棟幅3.5mm (推定)。



- 1 烧土 ブロックを含む暗褐色土
 - 2 黒色土 烧土ブロック・炭化物を含む
 - 3 暗褐色土 粘性がある
 - 4 黒色土
 - 5 暗褐色土 ローム質
 - 6 暗褐色土
- ※ 全体として砂及び粘土を含み
粘性が強く堅硬な土質である

0 1 2m

第109図 第52号住居跡実測図



第110図 第52号住居跡出土遺物実測図

第53号住居跡（第111・112図・図版29）

第6地点の北側にあり、第54号住居跡を切っている。なお、西壁の立上がりは検出できなかった為、推定したものである。

形状は東西方向に長い長方形を呈する。

大きさは主軸方向が4.5mで北壁は不明である。

主軸の方向はN-116°-E。

カマドは東壁南寄りにつくられており、底は床面より5cm程低くなっており、ゆるやかに立上がり、1m程の長さの煙道へ続く。

床はほぼ平坦である。壁高は36cmを測り、垂直に立上がる。

遺物はカマド中から壺7・18、甕24・25が出土しており、カマド脇の床面上から壺10が、そしてカマド北側の覆土中に流れ込んだ状態で壺8・9・11がまとまっており、壺3は中央部床面から、他は覆土中から出土したものであり、ほぼ本住居跡に伴なうものと思われる。

第53号住居跡出土遺物（第113・114図・図版64）

真間Ⅱ期に属する。

土師器

1 壺

MⅡ-1類 6 (セクション) 口縁部25%、底部60%残。橙褐色。器内外面磨滅。11(№16) 口縁部50%、底部45%残。橙褐色。器内外面磨滅。

MⅡ-2①類 14 (№6) 基準資料。底部50%、口縁部8%残。明橙褐色。

MⅡ-3類 10 (№2) 基準資料。ほぼ完形。橙褐色。7 (カマド内№18) ほぼ完形。橙褐色。器面磨滅。8 (№15) 口縁部48%、底部70%残。橙褐色。9 (№18) ほぼ完形。器面磨滅。橙褐色。

MⅡ-5類 16 (覆土) やや小形で器高が高い。ほぼ完形。橙褐色。やや砂粒の量が少ない。18 (カマド一括) 25%残。ちょうど歪んだ部分なので、口径は図よりもやや大きくなるものと思われる。薄手。明橙褐色。内外面荒れる。

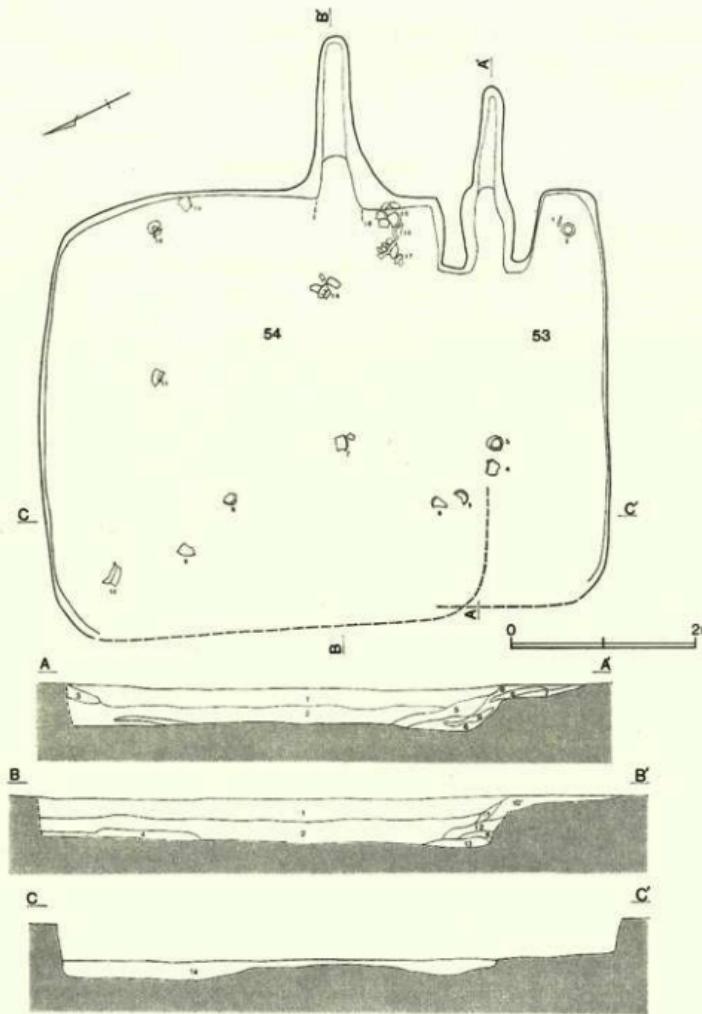
2 大形甕

MⅡ-9類系のもの 24 (カマド一括) 28%残。橙褐色。頭内面は一部器面剥離する。

3 甕

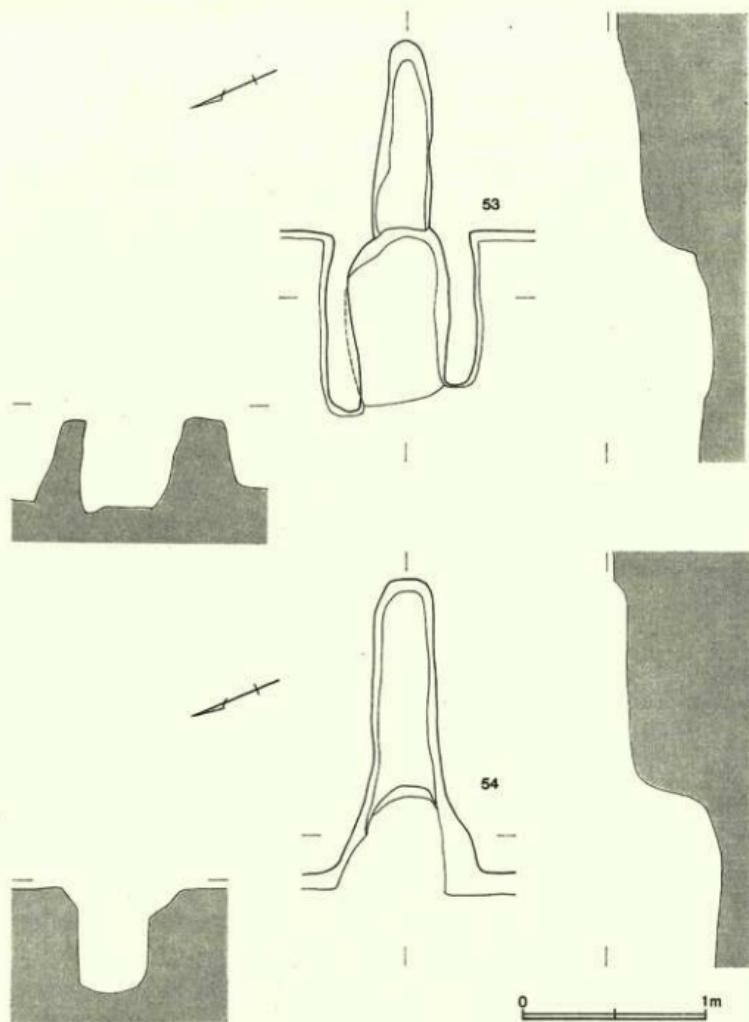
MⅡ-12②類系のもの 26 (№7) 底部のみ残存。淡黄褐色。外底に黒斑。

MⅡ-10類 25 (カマド一括) 底部～胴下半部40%残。橙褐色。外面橙茶褐色。



- 1 暗灰褐色土 砂 小礫 炭化物を多く含む。
2 暗灰褐色土 小礫 炭化物を多く含む。
3 暗灰褐色土 炭化物 烧土を多く含む。
4 黄灰褐色土 緩状に堆積し粘性がある。
5 暗褐色土 黒味が強く焼土をやや含む。
6 褐色粘土
7 暗褐色土 砂 烧土 炭化物を含む。
8 烧土 緩状に堆積
9 烧土 塊状 炭化物 灰を下部に多く含む。
10 暗褐色土 少量の焼土を含む。
11 烧土塊
12 褐色粘土
13 烧土 灰 炭化物の混土層
14 黄灰褐色粘土と暗褐色土の混土層(54住居裏方)

第111図 第53・54号住居跡実測図



第112図 第53・54住居跡カマド実測図

須恵器

坏 29 (54住覆土) 20%残。胎土には微細粒砂粒砂多含し、小石を僅かに含む。焼成良好硬質。灰黒色。一部灰色。小形でろくろ整形。底部外面は回転ヘラケズリ調整、口唇部内面に重ね焼き痕が残る。

蓋 30 (No.5) 50%残 かえりは丸くなり、奥まる。

平瓶 33 (カマド外一括) 25%残。微細粗粒砂を含む。焼成ふつう。暗灰青色。

第54号住居跡 (第111・112図・図版29)

第6地点の北側にあり、第53号住居跡に切られている。西壁の立上がりは検出できなかった為、床面等から推定したものである。

形状は南側がはっきりしない為、不明であるが方形を呈するものと思われる。

大きさは主軸方向に4.65mを測る。

主軸の方向はN—116°—E。

カマドは東壁を掘り込んでつくられており、底は床面とほぼ同じ高さでゆるやかに立上がり、1.1mの長さの煙道へ続く。袖はなくなっていた。

床面は平坦で、壁高は38cmではほぼ垂直に立上がる。床面下には掘り方が検出されており、壁寄りでやや深く15cm程度であった。

遺物は壹22がカマド中から出土している。

第54号住居跡出土遺物 (第113・114図・図版64)

真間期第Ⅱ期に属する。土器取上げ番号と、出土状態から区別した北側壁よりのNo.18～No.13までを54号住の遺物とした。

土師器

1 坯

MⅠ:—1 頭 2 (54住覆土) 50%残。基準資料。淡橙褐色。底外面黒斑。1 (54住覆土) 30%残。橙褐色～暗褐色。焼成良い。3 (53住No.8) 60%残。明橙褐色。底外面に黒斑。焼成非常に良い。4 (54住覆土) 15%残。茶褐色。焼成は2と同じ。5 (覆土・セクション) 40%残。橙褐色。外面黒斑。焼成良い。

MⅠ:—2 頭 13 (53住No.13) 25%残。基準資料。橙褐色、外面一部淡橙褐色。12 (54住覆土) 20%残。淡橙褐色。

MⅠ:—3 頭 19 (54住覆土) 30%残。基準資料。橙褐色。外面底部黒斑。焼成やや甘い。20 (54住覆土) 40%残。橙褐色。

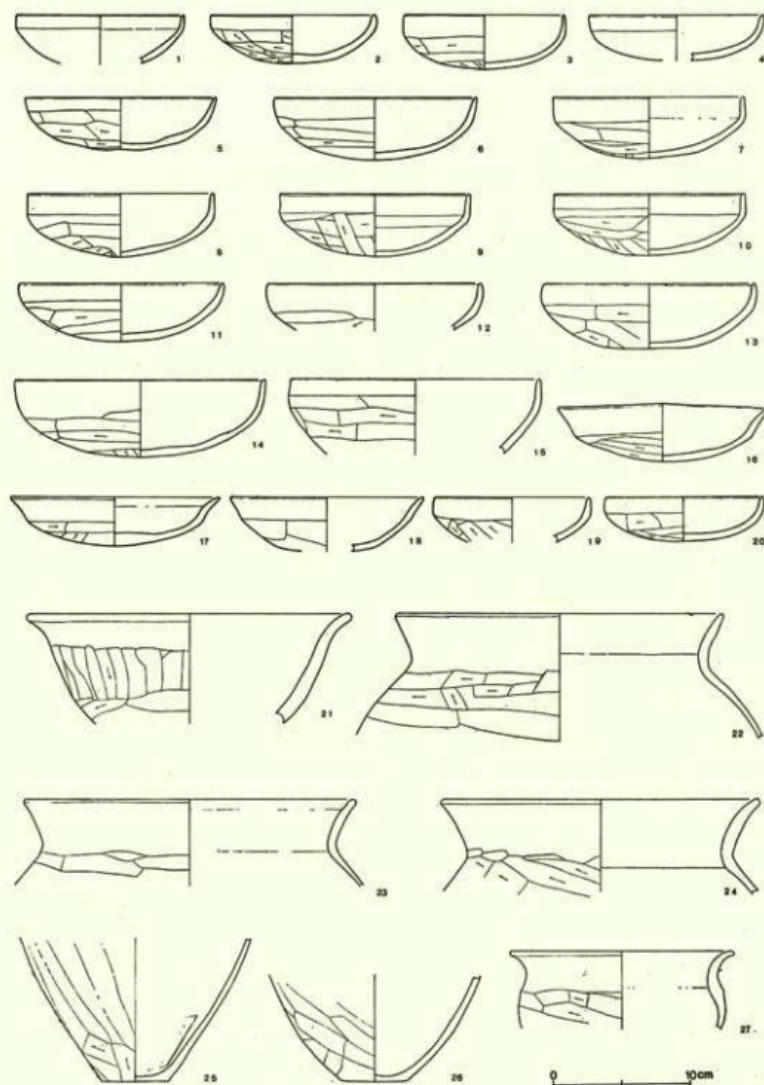
2 皿

MⅠ:—5 頭 17 (53・54住覆土) 口縁部20%、底部100%残。基準資料。

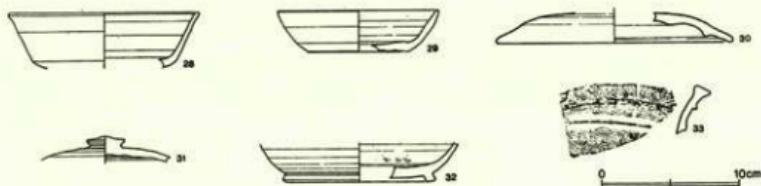
3鉢

MⅠ:—6 頭 15 (54住覆土) 30%残。基準資料。

MⅠ:—7 頭 21 (53住No.9) 25%残。基準資料。



第113図 第53・54号住居跡出土遺物実測図(1)



第114図 第53・54号住居跡出土遺物実測図(2)

4 小形壺

MII-8類 27 (54住覆土) 25%残。基準資料。口縁部内面は磨滅する。

5 大形壺

MII-9類 22 (54住カマド一括) 23%残。基準資料。23 (53住No.10) 25%残。口縁部上半内面に緩い稜をもつ。胎土、焼成は22と同じ。橙褐色。

須恵器

1 坯

28 (53住セクション) 10%残。細、粗粒砂を含む。焼成良。暗灰青色。ろくろ整形。底部外面回転鋸削り。

2 蓋

31 (覆土) 30%残。微細粒砂含み軟質。灰色。

3 高台付坯

32 (覆土) 25%残。微細粒砂含みやや軟質。灰白色。

第55号住居跡 (第115図・図版30・31)

第6地点中央部に位置し南側に56・57・58号の各住居跡がある。

覆土は褐色土を主体とし、上層は砂を含み、下層は炭化物粒子を含むものであった。

形状は北東隅を除く三隅の丸い方形を呈する。

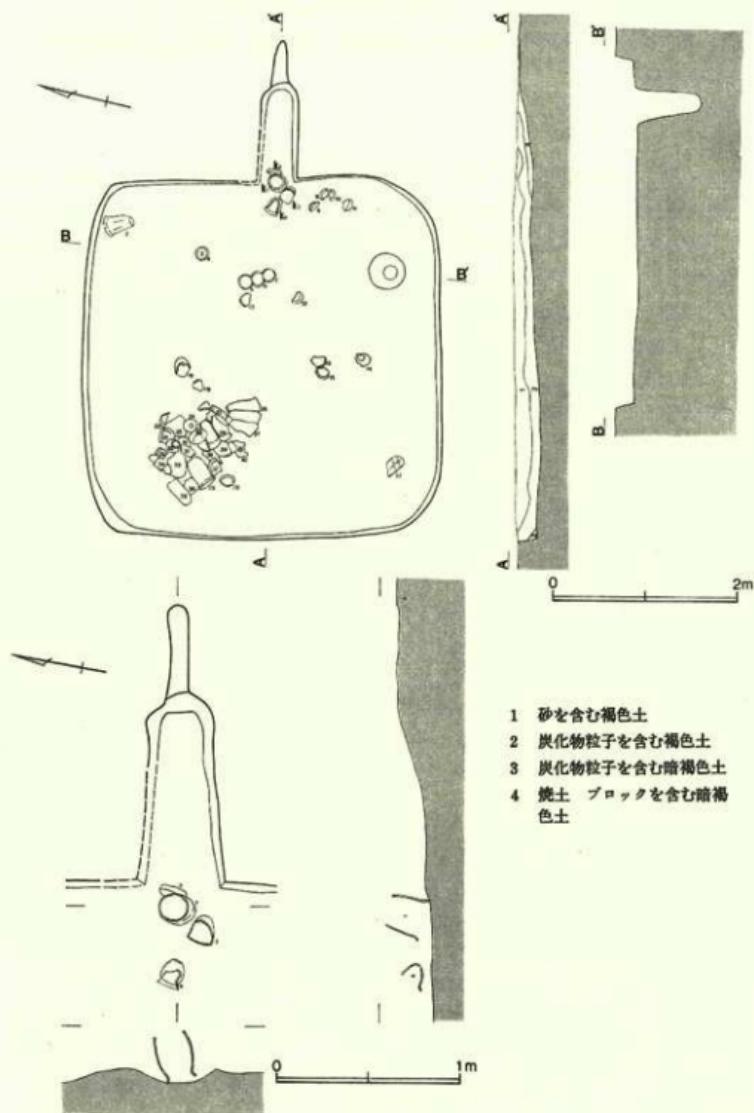
大きさは3.9m × 3.9m。主軸の方向はN-78°-E。

カマドは東壁中央部やや南寄りにあったが、袖等は崩れたものか確認できなかった。カマド焚口の中央部には甕が伏せて置かれてあり、支脚として使用されたものと思われる。底は床面と同じ高さで、壁から1.05m程掘込まれており、ゆるやかに立上がる。

柱穴は1個検出されており、南東隅近くに直径40cm、深さ70cmを測る。

床面はほぼ平坦で堅い。壁高は21cmでほぼ垂直に立上がる。

遺物はカマドの支脚として使用された甕34、周辺から出土した甕22・41、カマド脇の床面上から破片で出土した坯9・10・13、カマド前の床面上に置かれた様に出土した坯1・3・6・14・15、北側壁下の床面上から伏せた状態で出土した甕45、坯4があり、中央部～北西部にかけて一括して廻棄されたように床面よりやや浮いて出土した。坯2・5、小形壺18～21、24・25・27～32、甕33・



第115図 第55号住居跡・カマド実測図

35~38・40、頃42~46、紡錘車48があり、他は覆土中から出土した。

第55号住居跡出土遺物（第116・117・118・119・120図・図版64・65・66・67）

鬼高Ⅳ期に属する。遺物は壹、甕類の出土量が多い。壺は總じて焼きも、良くしっかりしてて、堅牢な感じ。

土器

1 壺

OⅣ:—1類 1 (No.6) S. 7。完形。基準資料。口径13.2cm、器高4.25cm。13 (No.8) 40%残るが歪んだ部分なので、口径は図よりやや大きくなり、1と同じ位になるものと思われる。段をもって、比較的長い口縁は内傾し、更に先端は内傾する。胎土は角閃石、酸化鉄などを含み、焼成は良く焼きしまり、橙茶褐色を呈する。黒色仕上げは施されない。

OⅣ:—2類 16 (No.9) 40%残。基準資料。4 (No.2) S. 8. 70%残。16よりもやや開く感じ。胎土には、角閃石、酸化鉄などの微細粒砂の他、粗粒の浮石と小石を少量混入する。焼成も比較的良好。つくりは同じ。赤茶褐色。底部に黒斑。9 (No.10) 黒色処理される。胎土は上記の2点と異なり、非常に密で、含まれる砂粒は細かい、少なく、焼成も比較的良好。色調は淡橙褐色。整形は木口なでの後口縁部のなで具による回転なで具、底部中央部にまで及ぶ。口縁部は一度外反してから直立する形態となり、他とは異なる。

OⅣ:—3①類 7 (No.15) 口縁部40%、底部60%残。基準資料。

OⅣ:—3②類 2 (No.31) S. 10 基準資料。口径は残部が橢円形のため正確ではなく、図よりもやや大きくなる。45%残。8 (No.12) 2とまったく同じ人物が、同時に作ったと思われる土器。残っている部分の性格によって異なるように見えるが、大きさも同じと考えてよい。つくり、整形、胎土、色調、黒色処理も同じ。15 (No.5) 完形。胎土には角閃石、酸化鉄、浮石の微細粒砂を含み、2よりも砂粒が多く焼きしまり硬質。内外面に黒色処理。胎土の色は橙褐色。10 (No.8) 口縁部は外反する。20%残。図上では口径が小さいが、15とほぼ同じ位になるものと思われる。胎土も15に近い。内面のみ黒色処理される。（炭素吸着）6 (No.13) 胎土には角閃石、酸化鉄の微細粒砂を僅かに含み密で、焼成の悪い持つと手が真っ赤になる粉っぽい土器である。明橙褐色。軟質。口縁部5%、底部30%残。12 (No.11) 胎土は6に類似するが、もう少し粗い感じ。焼きも悪い。80%残。

OⅣ:—4①類 5 (No.19+20) S. 9 80%残。基準資料。

OⅣ:—5①類 14 (No.3) ほぼ完形。基準資料。内面木口なで後、指なでが施され滑らか。

3 (No.4) S. 6 80%残。胎土、焼成共14と同じ。やや鋭さがなくなる。口径13.7cm、器高4.5cm。

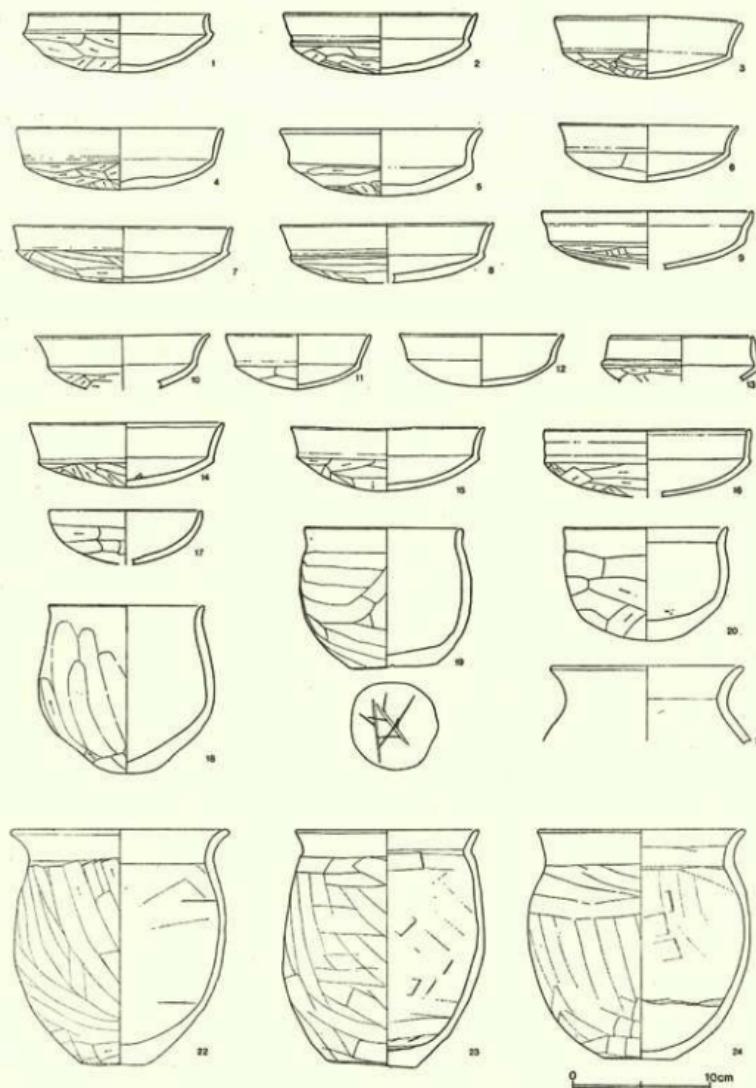
OⅣ:—5②類 11 (ピット出土) 口縁部80%、底部60%残。基準資料。明橙褐色。

OⅣ:—7類 17 (No.13) 30%残。基準資料。口縁部が屈曲している部分なので、口径はやや大きくなるものと思われる。黄褐色～淡橙褐色。

OⅣ:—9類 30 (No.41の下) 口縁部20%、底部100%残。基準資料。口縁部の磨滅が著しい。

2 小形壺

OⅣ:—10類 31 (No.23) 口縁部を欠き、100%残。基準資料。胎土には、砂粒が多く含まれ小石も



第116図 第55号住居跡出土遺物実測図(1)

目立つ。重量感がある。焼成良く焼きしまる。内面は黒色処理され灰黒色、外面、橙茶褐色。黒斑2個。

O IV:—11類 26 (No.29) 胴部21%、底部100%残。基準資料。胎土には、角閃石、浮石などの微細粒砂を含む。焼成は悪くもない。整形も難である。胴上端は割れ口であるが、手捏ね風となる。底径5.95cm、現存高13.0cm。

O IV:—12①類 18 (No.37・38) 口縁部100%、底部30%残。基準資料。二次加熱。器面の磨滅が著しい。胎土には粗粒砂、小石を多量に含む。朱色、外面口縁部灰黒色。20 (No.21の下) 器高は低くなる。二次加熱。粘土は18と異なり、密で砂粒は小さく、量も少なく、軟質で粉っぽい感じのものである。器面の磨滅が著しい。朱色～灰褐色。19 (No.21) ほぼ完形。前2者と違い胎土は、普通で、焼成も比較的良い。底部は平坦で、底部と体部の境は笠削りによって区画される。底面には木葉痕。内面胴部は、斜位になで上げられる。器形は歪む。

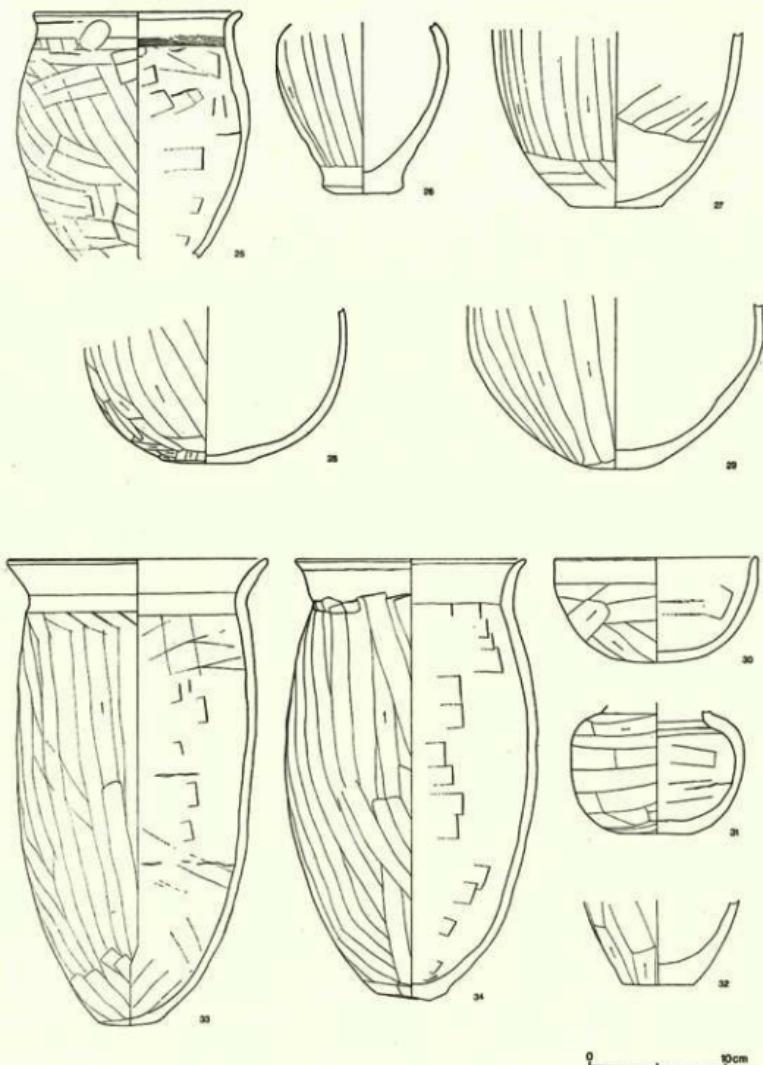
O IV:—12②類 40 (No.37・43) 基準資料。二次加熱。胎土には片岩、石英などの粗粒砂、小石を多含。焼成も比較的良い。頸部外面には巻き上げ痕顯著。つくり、整形は難である。淡橙褐色。一部朱色。黒斑1個。28 (No.43) 赤彩。胎土は精製され密である。角閃石などの微細粒砂を含む。橙赤褐色。底部に黒斑(10×10cm)。外面笠削り、内面は笠ナデつけ。器内は均一。21 (No.38) と29 (No.33の下) は同一個体と思われる。胎土に粗粒砂、小石を多く含み、器面の磨滅が激しい。

O IV:—13類 25 (No.36・33の下・1) 基準資料。二次加熱。角閃石、酸化鉄などの微粒砂と、石英などの小石を含む。つくり、整形は難。胴部上位は下方へ削られている。朱色～灰褐色。

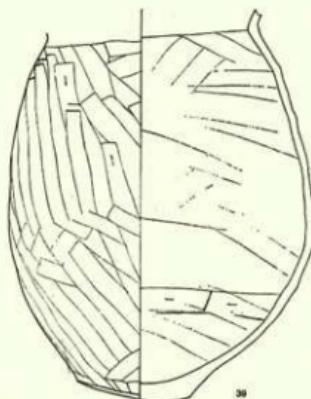
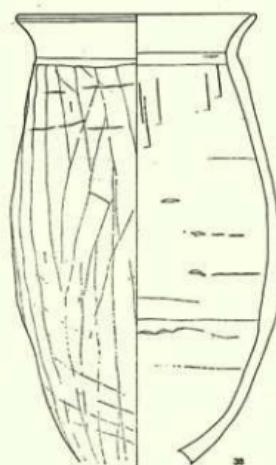
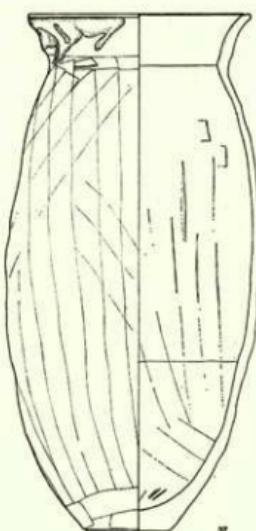
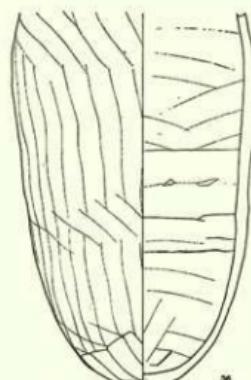
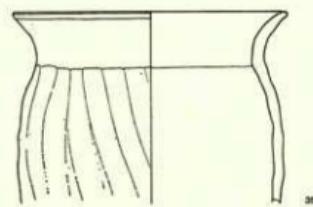
O IV:—14類 24 (No.24) 基準資料。口縁部と外面は、器面全面が荒れる。二次加熱により、明黄褐色～朱色～灰紫色を呈する。胎土には3×4mm大の浮石を含む。比較的丁寧なつくり。内面底部には有機物が付着する。22 (カマド内No.4) 器面の荒れは部分的となる。器高は高く、口縁の外反は強く、胴部最大径、底径はやや小さくなる。黄褐色、一部朱褐色～灰褐色。つくり、整形は比較的丁寧である。23 (No.18・32住No.26) 器形は歪む。二次加熱。前者の2つよりも、胎土に含まれる砂粒はやや大き目で、量は僅かに少ない。胴下半部に本来の器面が残る。橙褐色、朱色～灰色。内面下半5×5cmの黒斑。口縁部52%、底部100%残。底径大きく、胴部の張りは弱く、細長い感じとなる。口縁部は短く「ハ」の字状に開く。

3 麽

O IV:—16類 33 (No.26) 口縁部100%、胴部85%、底部35%残。基準資料。胎土には、角閃石、酸化鉄などの細、粗粒砂を多く含み、5×7mm大の浮石を特徴的に含む。黄褐色、外面、朱赤色～黒色。35 (No.29の下) 上部のみほぼ完形。二次加熱の為、口縁部の胎土は変質する。頸部には粘土が焼けつく。朱色～灰褐色。胎土は33と同じ。36 (No.29の下・30) 胴部75%、底部100%残。胎土は35と同じ。内面、淡褐色。外面、茶褐色～褐色。34 (カマド内No.1) 胴部は橢円形となる。口縁部は立ち気味。器高は33よりやや低い。胎土には大粒の浮石は含まれず、普通で、焼成良く焼きしまる。胴下部には粘土が焼けつく。ほぼ完形。37 (No.30の下・No.40) ほぼ完形。器高は高く橢円形を呈する。底径は他のものより大きく平坦で、木葉痕を残す。口縁外面に粘土焼けつく。胎土には石英などの小石目立ちやや粗い。朱色～灰褐色。内面、灰褐色。41 (カマド内No.3) 口縁部を欠く。底部100%、胴部25%残。胎土は33と同じ。38 (No.28) 器肉は分厚い。胎土は34に近いが粗粒砂、小石が目立つ。

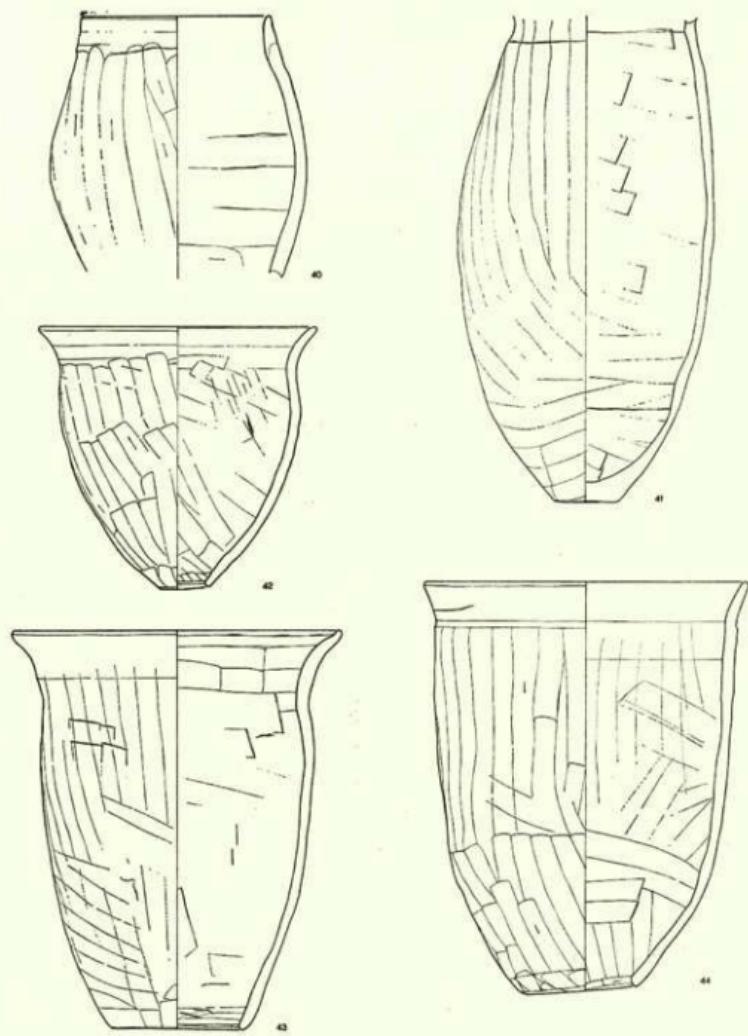


第117図 第55号住居跡出土遺物実測図(2)



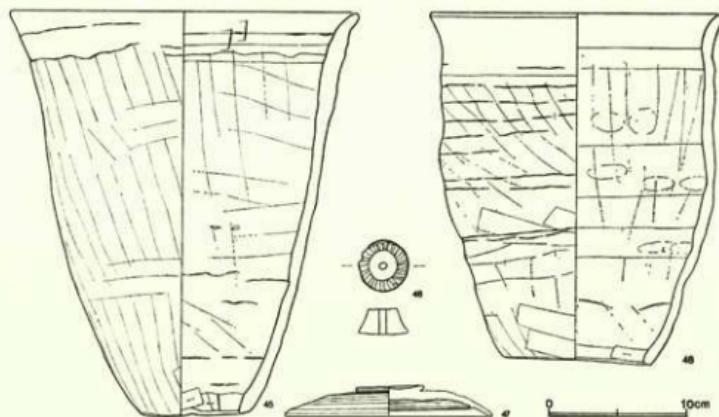
0 1 10cm

第118図 第55号住居跡出土遺物実測図(3)



0 10cm

第119圖 第55號住居跡出土遺物實圖(4)



第120図 第55号住居跡出土遺物実測図(5)

赤茶褐色。27 (No.33の下) 胎土は33と同じ、淡黄褐色。底部100%、胸部40%残。39 (No.7) 口縁部を欠く。約80%残。底部は突出し、器形は著しく歪む。胎土は精製されて、密である。角閃石、浮石などの微細粒砂を含む。茶褐色。32 (No.27) 底部のみ残存。胎土は精製されて細い。石英などの粗粒砂を少量含む。焼成も比較的良い。内外面とも黒褐色。

4 類

O IV-i-16②類 43 (No.13・22・41の下・43) 口縁部40%残、以下ほぼ完形。基準資料。胎土は壺33に似る。焼成良く焼きしまる。橙褐色～黄褐色。黒斑 (20×20cm)。46 (No.14) 口縁部25%、胸部100%、下端45%残。胎土は①類の45に似る。白色針状物質は認められない。巻き上げ痕顯著。胴下半部の接合痕は外面にある。橙褐色。朱色～灰褐色。

O IV-i-17①類 45 (No.2) ほぼ完形。基準資料。角閃石、酸化鉄、浮石、白色針状物質などの微粒砂を含む精製された胎土に石英などの粗粒砂、小石を含む。つくり、整形は難で巻き上げ痕、接合痕が残る。焼成良。橙褐色～黒褐色。44 (No.27・30・30の下・41の下) ほぼ完形。胸部下半に張りをもつが、直線的な開きをするものとしてこの類に入れた。器高は45と同じ。胎土には微細粒砂を多く含み、粗粒砂、小石を僅かに含む。焼成は45よりも良く焼きしまり硬質。橙赤褐色、一部朱色～褐色。

O IV-i-18類 42 (No.25) 口縁部60%を欠く。基準資料。内外面赤彩か？ 胎土は43に似る。器面は内外面とも荒れて、ザラザラした感じ。黄褐色、朱色～灰黒色。内面に赤色が良く残る。

須恵器

蓋47 (No.12) ほぼ完形。細粗粒砂、小石を僅かに含む。焼成良く硬質。外面には自然釉が付着する。紫灰色。かえりは小さく鋭い。